年中行事

冬の興行

文樂座人形淨瑠璃

文樂座

四ぐんし

一部 金十五錢

郷土藝術の唯一者として今日の興味の尖端に立てる文樂座人形淨瑠璃はその新興以來爰に十二回目の新陣容に就かんとするもので御座あます。

かく隆々たる復興振りを示現し得らるゝは全く皆樣の御厚情と限りなき熱烈な御支持に依るところ、厚く御禮申上ます。

十二月は四ツ橋文樂座が新に拓きました年中行事の一つ「冬の興行」と臻し、精鋭新進を連れて最も華絢に最も豪快にこの歳晩をおくらんとするもので御座あます。新興文樂座第一年史を最も華やかに盛飾出來ますやう烈々の御厚情もて御聲援の程偏にお希申上ます。

昭和五年十二月五日

四ツ橋

文樂座

昭和五年十二月五日初日

初日　午後二時　開幕
毎日　午後三時　開幕

二日目よりの・御觀覽料・

一等椅子席　御一名——金二圓五十錢
二等席　御一名——金一圓
三等席　御一名——金五十錢
一等お座席　御一名——金三圓

一等お座席
一等椅子席　は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符専用電話　南四七一一番
電話南　七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座あますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

長三八〇三番
四九四〇四番
四九四一四番
(44)土佐堀

文楽座

太夫 竹本津太夫

奥州安達原

東海道膝栗毛

豊竹 太夫
竹本 太夫
豊竹 太夫
竹本 太夫

三味線

太夫 竹本 太夫

二日目より

豫定時間表

前

碁太平記白石噺

淺草雷門の段（午後三時開幕の豫定）
揚屋の段（三時四十分開幕の豫定）
御食事時間　二十分間の豫定

中

奥州安達原

敷妙使者の段（五時開幕の豫定）
矢の根の段（五時二十分開幕の豫定）
袖萩祭文の段（五時四十分開幕の豫定）
御食事時間　二十分間の豫定

次

戀娘昔八丈

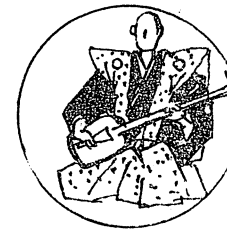
白木屋の段（七時廿五分開幕の豫定）
鈴ヶ森の段（八時四十分開幕の豫定）
御休憩時間　十五分間の豫定

切

宮多八郎次郎兵衛　道中膝栗毛

赤坂並木の段（九時三十分開幕の豫定）
午後十時三十分終演の豫定

（舞臺裝置　松田種次）



維新前後の淨瑠璃界

文樂今昔譚より

明治初年を境界線として

維新の曙光が漸やく見へ出して來た明治初年前後のこと、道ゐに商業地の大阪も、物情は騷然たる有樣であつたが、それでも芝居や淨瑠璃などの興行物は別天地の觀があつて、可なりな成績で打ち續けてゐたのは一つはまだ〳〵斯界に名人や巨匠が多かつたからの故でもある。竹本長門太夫所持の『忠臣藏』九段目の床本の終尾にこんなことが書いてある。

安政元年九月十八日、天滿北西角芝居にて、忠臣藏通しに九段目を語るところ、此日異國船來る故、よんどころなく芝居休業となる。

黑船來が直接興行物に及ぼした影響の一つである。

明治元年一月（實は慶應四年）稻荷社內に在つた文樂座は、初春狂言に『金門五三桐』を出さうとしてゐた。世間は御維新の騷ぎで、なんとなく落ちつかず、不安の空氣に滿ちてゐる時に、而かも大阪城に戰雲が棚曳き、伏見鳥羽の敗戰で、德川慶喜公辛くも天保山沖から江戸へ遁れやうとする、かうした場合、舞臺では例の石川五右衞門が、春宵一刻……でも麗らかな眺めぢやなあ……など〻遣りかけたが、あまりにも、世間と懸け離れすぎてゐたので一月は興行中止。二月の十二日になつて、もうそろ〳〵麗らかな眺めになつてもよさそうなものだと、こつそり初日を開けたが、むろん獸目、十二日間より芝居は打てなかつた、此時の一座顏觸れが、六代目染太夫、七代目咲太夫、四代目彌太夫、五代目湊太夫、越路太夫、實太夫、三味線團平、濱右衞門。人形辰造、玉造などである。而かし三

月からは、さうした騒ぎも稍平常に復して、四十六日間も打ち續けることが出來たのは大阪の土地らしいやはり豊かなところがある。狂言が『一の谷嫩軍記』と『四つ谷怪談』であつた。かうして文樂座は引續き一年に五回または六回宛の興行を打つてゐる。

明治元年十二月、大阪府は西區松嶋町に新たに遊廓の設置を許可し、從來各町に散在してゐた公許地以外の小遊里を此所へ移轉集合させて、遊廓整理を行ふことになり、土地の發展を圖る可く、凡てを江戸吉原に模して、仲之町を中心に、可なり大規模な設置をすることゝなつたが、土地の偏した爲になか〳〵急には思ふやうな實が揚らない、そこで、府では土地繁榮の一策として、道頓堀の歌舞伎芝居と、文樂座の人形淨瑠璃を此處へ移す可く計畫したのである。歌舞伎の方は道頓堀の仕打三榮へ、文樂はその座主へ、共に命を下した。この兩者は直ちに旨を含んで松嶋興行の準備にかゝつた。三榮の歌舞伎は不入りの爲めすぐ退轉したが文樂座は永續することになつた。明治四年新築の工を起し。五年正月、文樂座開業の興行を始めたのである（現今の松嶋八千代座の前身がそれである）文樂座はこれで博勞町稻荷からこゝへ移轉してしまつたのである。かくて文樂新築記念興行は花々しい盛況で、而かも五十三日間打ち續けの大當りを取つたのであつた

狂言は太功記の通しと御祝儀三番叟。

一座の太夫は、春、越、古靱、越路、染等。

三味線は團平、新左衛門、吉兵衛、人形は玉造、辰造、喜十郎、玉之助、玉治等の番附面の顔ぶれ。春太夫の尼ヶ崎、越の杉の森、古靱の妙心寺、越路が大德寺。

此時湊太夫が櫓下を去つて、春太夫これを繼ぎ、吉田玉造始めて人形櫓下となつた。

この明治五年には、明治新政府からは、曆の改正を始めとして、さま〳〵な改革令が相次いで出た、斷髮令、徵兵令、娼妓解放令、などがそれで、文樂座の淨瑠璃やその他の興行物にも十月二十一日附で左のやうな布令が下つた。

壬申十月二十一日布令

申第三百七號

從來能狂言其他音曲歌舞の類者古の嘉言善行世の模範となり、奸惡淫褻人の懲及となるものを擧げ、之

れを音曲に鳴し手之れを舞ひ足之れを踏み人の耳目を歡ばしめ事情深切にして無學文盲のもの觀感いたし易きを主とし勸善懲惡の一端なるを以て大に世に行はれ候處近來其本旨を失ひ徒に觀美のみに相流れ人心を蠱惑し風俗を紊亂する弊害不就者兼而相達し置候處今度教部省より別紙の通り達有之候間其營業のものは深其旨を體し可申候事

右の趣其營業の者へ相達候間爲心得管内無洩相達する者也

壬申九月　大阪府

能狂言始め音曲歌舞の類は人心風俗に關係する處不尠候に付き左の通り管内營業の者共へ可相達事

壬申八月　教部省

一、能狂言以下演劇の類

御歷代の

皇上を模擬し

上を褻瀆し奉り候體の儀無之樣厚注意可致事

一、演劇の類專ら勸善懲惡を旨とすべし

淫風醜態の甚しきに流れ風俗を敗り候樣にては不相濟候間弊習を洗除し漸々風化の一助と相成候樣可心懸事

一、演劇其他右に類する遊藝を以て渡世致し候を制外者抔と相唱へ候從來の弊風有之不可然儀に候條自今は身分相應行儀相慎み營業可致事

以上

また翌六年には更に以上の布令に基いて文樂座の樂屋へ左の注意書が貼り出された。

一、從來御上樣御布告の趣急度可申相守事

一、皇上樣御歷代の御名前又は差支の文句有之候淨瑠璃一切語り候儀は不相成候事

一、世話淨瑠璃心中物都而風儀不可宜場者能々調べの上可語候事

一、時代派にても風俗に拘り候場又はサワリ抔にも心を付めしき處は急度相除候事

一、旅稼に罷出候人々其砌世話人に屆出候處近來多く等閑に相成以後者上下の無差別其年の世話人に屆出候事

一、出勤中銘々禮儀第一に致し樂屋等にても風儀あしき事無之樣且風俗衣服等も隨分質素を相守藝道出精第一に可勤事

右の條々急度相守營業可致候若相背者連外可致候事

明治六年改

明治新政府の事業は細心の注意を以て行はれ次第に人心も安定し、世間の景氣も回復した。かうした期間長門太夫歿後の我淨瑠璃界は、やはり長門薫育の香りが高く、澤山な名人を擁してゐたのである。即ち長門太夫直系からいふと四代目長門、專門藝以外に學才があつて、淨瑠璃大系圖の著作があり、古實考證家として斯道を益した。天王寺村七千五百石の大庄屋といふ名譽の位置にあつて、淨瑠璃を語り、高座に登る爲めに名譽の職を捨てゝ顧みなかつた異色ある長尾太夫豪音で端場を專門にした名人四代目彌太夫。意氣な聲で無類の艶語りと稱され、入れ墨の左官の子として聞えてゐた六代目綱太夫。豪傑肌で至藝の持主、慘殺されたので一層名高い古靱太夫。世話物語りとして、日神月神と云はれた五代目湊太夫、七代目咲太夫。又少し後には盲人の美音家四代目住太夫、人情語り世話物の名手五代目彌太夫。などを數へることが出來一門繁榮の跡を見せて居る。

また長門系以外の人々には。時代物の第一人者と云はれた六代目染太夫。門下の八代目染太夫も早世したが大將の器を備へてゐた。麿揚大量な曲風に一流を立てた五代目春太夫はその門下に越路後ちに攝津大掾といふ大物を出してゐる。或は又高野の僧で大兵大音の怪物三光齋といふのや滑稽淨瑠璃專門で賣出した奇人山城掾など、多種多樣にいづれも淨瑠璃界を縱橫に馳驅してゐる有樣はまことに花々しいとも何んとも云ひ樣がない。それといふのも當時斯界は自由な空氣に滿ち〳〵て、一能あるものは何んの束縛もなく、思ふ存分その腕を揮ふことが出來て、各々特色ある藝風をズン〴〵延ばして行くことが出來たのであつた。そこで以上列記したやうな、一家の特色を鮮明に顯はした人々が澤山に出たのは、もうその以後には見られない圖である。

淺草雷門の段

手品師豆造事　豊竹島太夫
どじよう

勘九郎　竹本長尾太夫

宗六　（竹本涙花太夫　竹本文太夫）

おのぶ　竹本長子太夫

亭主　（豊竹辰太夫　竹本播路太夫）

（野澤歌助　鶴澤芳之助）

人形

手品師豆造事　吉田玉幸
どじよう

前

碁太平記白石噺

淺草雷門より新吉原揚屋の段迄

この淨瑠璃は安永九年正月江戸外記座に上場されたもので作者は烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛の三人合作。その内容を申し上げますと、奥州逆井村の百姓與茂作の姉妹が貧苦のために江戸新吉原で遊女となり全盛を謳はれてゐると、郷里から妹の信夫が姉を尋ねて來て偶然の機會から姉妹が邂逅します、姉の宮城野は妹の口から父の横死を知つて敵討ちを決心しましたが揚屋の亭主宗六から曾我物語を例にして却て懇ろに意見されるといふ筋で御座ゐます。この實説は松平陸奥守（仙臺侯）の家老片倉小十郎の劍術の師範に田邊志摩といふ者があつて享保三年中白石在で領内足立村の百姓四郎左衛門のために行列を破られたので四郎左衛門を無禮討にしたがこの時四郎左衛門に娘があつて深くこの事を無念に思ひ陸奥守の劍術師範瀧本傳八郎の許に傳手を求めて姉妹共に奉公し六年間劍道を修業し瀧本の助太刀で享保八年仙臺白鳥明神の境内で首尾よく敵志摩を討ち取つたといはれてゐます。

（床本）雷門の段（口）

東西〳〵、何と何れも樣方。先このこよりで徳利を釣りまするが。即是をなぞらへて。夕立の節。天より

金貸勘九郎　吉田扇太郎
大黒屋宗六　吉田玉松
妹おのぶ　桐竹紋十郎
茶店亭主　吉田利一男

新吉原揚屋の段

切　竹本錣太夫
豊澤新左衛門

人形

傾城宮城野　吉田文五郎
禿しげり　吉田文二郎
女郎宮里　吉田市松
女郎宮柴　吉田文作
妹おのぶ　桐竹紋十郎
大黒屋宗六　吉田玉松

神鳴りが落せした太皷釣の体でございます。サヨウ。只今お目に掛けましたは。古めかしい事計。扨是からごらんに入れまするが。先第一籠抜比翼抜。夫より段々珍しい手品盡し扨先一升入の徳利を呑込ますると八畳敷の大金玉と成ます。其大金玉を根元よりふつりとれじ切て。浦川へドブンと投込まするとたちまちの内に姿へんじて登龍と成升る麟當。末々をお樂に御ゆうくりと御覽の程をば願て置き升る。ヤ。こふしやべつて計居りましては。私のゝどがひあがりまする。少々ばかりおみようが錢を願つて。腹中を丈夫にしてやらかしませふ。お立合の内から。西の方から十二文東の方から十文。向ふからも十文。ハイ〳〵コレハ〳〵お武家樣やお町人樣方は格別錢ばなれの宜しい事は又格別さ。御前づいせふ口合に二文三文四文錢なみ大体な事ではないさ。めん〳〵笑ひ催して我家〳〵へ立歸る。跡にどじやうは錢揃へ。有難い〳〵。今日も先五百に成た。ドリヤ息つぎに一盃と酒屋をさして急ぎ行。淺草と云へど暫も淺からぬ。けふ觀音の御參り下向の其中に人附合も吉原で。大福屋宗六といやみけのない立嶋や茶屋の床几に腰打かげ。イヤコレ亭主。ちと待合す人も有〳〵座敷が借りたい。ハイ〳〵夫は〳〵お安い事マアこちらへお通りさ。亭主が案内に宗六は茶屋の内へと入跡へ。佛には後を見する尻は勘九郎といふならず者。我物顔に大道を股一ぱい

に來かゝりて。エゝ又どじようめがけつからぬ。コレ亭主。爰へ店出すどじやうと云やつ。どつちへぞ行をつたか。イヤたつた今迄店出していましたが。大方酒でも呑にいた物でござりませう。エゝいま〳〵しい。酒所でも有まいに。おれが催促に來る事を知つてはづしやがつたに極つた。けふはしやしむり取拔かにや置かんのぢやと、床几にどつさり腰かくればお茶一つと汲んで出す。茶碗取る間も白眼廻し。コリヤヤイ亭主モウ時分は何時頃じやぞい。ハイモウ七ツ下りでござりませうわい。エゝよいかげんな事をぬかせやい。我時計じや有まいし。しつかりと夫が分るもんかい。エゝこんな出ばらいおりやいやぢやい。味い茶一杯汲んで來いと。一寸いふ事も憎手口。聞かぬ振して亭主が出花。汲やしつらん人心。細き枝をば力草。おのぶは姉に逢たさの。東と聞けど當途さへ亡き父母をおいづるに。順禮姿とぼ〳〵と尋れさまよいこゝかしこ。立休らひてコレ申御亭主樣。問たい事がござり申すさ。吉原で名の高い女郎サア。何と云めす知ていさるなら。敎へてくんさいチャアと。云ふに亭主は打詠め。ムゝ見れば娘の順禮衆。年端も行かぬに一人かいのふそふしてマア吉原で。名高い女郎と云ては知ぬが。夫はどこの名は何といふ。サア名を知申せば夫へ行申す。うんらが姉さあを尋申チャア是は又こまつた物。それではとんと分らぬわいの。ヤ幸奥にござるお客。吉原邊の旦那と見ゆる。一寸尋れて見てやろふ。ちとの間そこにと云捨て亭主は

（末本）雷門の段（奥）

終始聞居る勘九郎が猶撫聲で傍により。コリヤ。わりや姉を尋れる者と云ふが其姉に逢はしてやろうかいヤア。そんなら逢はしてくれめすか。ムゝ逢はしてやる〳〵はやるが。コリヤよふ聞けよ我が尋る其姉に逢ふと思へば吉原といふ所へ奉公をせにやならぬぞよ。ハテこがいな者でも戀人があれば居申は。サゝそこぢやてな。其奉公するには大分むつかしいマアこうぢや此おれを我が伯父ぢやと云れば奉公にも置かず。又姉にも逢れぬぢやによつて。今からおれ

を伯父ちやといへよ。ムヽ合點かく。サア〳〵そんならけいこの爲愛で一寸云て見や。アイサ。かしこい者ぢやなア。姪よ。伯父サ。ムヽそふぢやノチ姪よ。伯父サ。チヽそふぢやよふ覺へる。テモマアよい子じやなア。アハヽヽヽ。そんならおれが連て行。サアサヽヽヽ歩め〳〵アイヤコレ。勘九郎待た。ムヽおれを呼だのは誰ぢやぞい。イヤ誰でもない。宗六ぢや。ヨウコレハ角町の親方。此勘九郎を呼かけたは何ぞ用でもこざんすかいの。イヤ外の事でもないが。コリヤ悪いぞよ〳〵。高の知れた代呂物。笠の蟹が飛ぼふぞよ。イヤコレ親方そんないやみを云はるな。此娘はおれが姪他人のかまふ事なかサ是で云分有ならばおれも正躰糺さにや置ぬわ。コレ親方。氣の短い。去迚はお氣の短い。コレ氣の短い賣まいといふにこそ。一寸元値にはづれるけれど。エヽ何とせふしよ事がないと。矢立取出し證文を認る。申コレ伯父サア。あの人に奉公すりや姉さアに逢れ申かよ。ムヽよい〳〵委細はおれが呑込だ。可愛そふに何にも知ぬ此娘をイヤサ可愛らしい代呂物を。買はづそふとしたはいと。いひつヽ渡す五十兩。證文請取讀終り。サア此からはこつちの子ぢや。こわい事も何にもない。姉にもおれが逢してやる。せかずと歩行と手を取れば。エヽ嬉しうござる伯父サア。觀九郎をば伏拜めば、つばで紛らすとんぐり目玉。出ぬ涙より宗六が。不便と思ふ目の内に。泣ぬ涙のしのぶばか娘引連立歸る後には一人勘九郎が金いたゞいて舌なめずり。テモ扨も近年にない此上首尾手もぬらさず五十兩とはこいつは程よく當ツたわい。アハヽヽヽドレ〳〵此勢に一ばいせふそふぢや〳〵と一人えみ。金懷へ勘九郎は呑屋をさして急ぎ行。よしずの影に最前より。聞居るどじようがそろりと出。テモどめつそふな勘九郎め。何所の者やら知ぬ者を。おれが姪ぢやの何のとぬかして。人の子を引大枚の金設け一体常から商賣なしで何をして喰やがると思ふて居た。マ悪いやつちやなア。あんな奴を生して置てはきつい殺生。チヽそふぢや。是迚むこふさいそく仕おつたかばり代官所へ訴人してやろ。こふつと待

よ。夫れもよいがアノ懐に持てけつかる五十兩。あいつをおれがせしめると怨ちあいつがぐにや〳〵〳〵と成おるは。そこで我等がほつぽがぬくもると云物ぢや。イヤこいつは上分別ぢやわい。併しあの金を奪取には何ぞよいこんたんが有そうな物ぢやがな。ムゝ此間一寸聞ばあいつの親父は死ぬる小悴もてこれたそふな。所へおれが持込んで地藏樣になつてぬつと出るはよいが。そのこしらへに困つたわい。どうした物ぢやろうなア。チツト。ある〳〵。幸さつきに地藏餡が賣仕まい。荷物を茶店へ預けていんだあれをかふして斯うするは。そこできやつがだまされてワツト泣をるは。所をおれが善かな〳〵と云てやらかすは。もし行そこなふたら元々ぢや。おつと品玉の種が出來た〳〵。ハーア我ながら遖智慧者と。どぢやうは後先見返して又もよしずへ忍び入。斯とは知ず觀九郎。ほろ酔機嫌の千鳥足。エゝ酔ふた〳〵。エゝ。きつふ酔たわい。マア斯酔た所が何ぢや有ふな。マアざつと極樂世界。イヤけふの程のよさ。けふはおれが誕生日ではなし。親父の逮夜は一昨日の晩と。併し懐に入て置た五十兩。もし懐中でづいこふは召されぬか。おつと有ぞ〳〵有難い。先有難山吹の御開帳と見返す向ふへすつくりと。どしやうは總身餡の粉の。顔もべつたりうどんの粉。袈裟と見せたるつぎ〳〵の襦袢も千手觀音の。やどりもかゆきな古頭巾。錫杖突立惡身して。ソモ出來合の地藏尊。觀九郎は歸りしやうぬは。コリヤ何々者ぢや早くそこをなくなれと。云へばおかしな聲音にて。ムゝよきかな〳〵我こそは。さいの河原の地藏尊とは我事なり。十ヲにも足らぬ幼子の。中にもそちが悴めは。一重二重と積石を苛責の鬼の鐵棒で。突こはされてアレナコレナ〳〵〳〵〳〵。地藏樣アノ鬼こわいと逃げて來る。其外持遊さつま芋。買たいさいふ度毎に。さい錢迄も貸してやる。汝も哀れと思へやと衣の袖に泣地藏袈裟で涙をぬぐひける。さしも我强き觀九郎も。我子のかせに縛られて。恩愛の涙ほた〳〵〳〵〳〵。ア悲しい咄しをエゝ聞ました。扨はお前樣がアノさいの河原のお地藏樣でござりますか。私が所

の小僧めが參りましてきつふ御厄介になりますか。承ればおさい錢を使ひますとは餘りで勿体ない。ム〜使ふ共〳〵是迄さい錢の〆高が十一兩二歩二朱。只今我へ戻してたも。ハイ〳〵返します共〳〵。幸こゝにと懐より以前の財布取出し。封押切て。ヱ〜一ツ。二ツ。南無三皆小判で御ざりまする。はしたがなふて困つた物よ。儘よ十二兩上ます程にどうぞ一歩二朱おつりを戻して下さりませと。こわ〳〵ながら差上ればム〜よきかな〳〵早速つりもやつたけれど。所々の出店を皆はいされて當時我等すかんぴん。どふでまだ〳〵小遣ひもふ五兩だけ預けて置きや。ハイ〳〵イヤモウお地藏様のおつしやる事。宜しふお願ひ申しまする。と又差出せばよきかな〳〵。去りながら。日頃汝が悪黨故。子の罪親に報びきて。此世を去りし我が親。汝に是も傳言有。ヱ〜、扨も〳〵情ない。シテ。親父は何と申ておりましたへ。チ〜よきかな〳〵冥途へ行く時に迎ひに來た。火の車の人足賃が金七兩。地獄の釜の油の入用二石八斗八升。劔の山へ登る時三千七百本の脇差の借賃。其外花代。抹香代。えんまの帳面三十三兩。是非共なければ成ぬ程に。受取てくれと云たぞよ。ヱ。是々申。何ぼ親の云附でもそれは餘り大そふな物入。まそつと減少は成ますまいかな。イヤ〳〵。一文もまからぬ。サアそこがお地藏様お世話ついでに、五兩位でどうぞあなたがまへ切なされて下さりませぬか。ヱ〜。モ。ねぎりこぎり邪魔くさい。しちりけつばいへけさうんばん。ヱ〜。じやといふて金が出來れば其方を。只今冥途へ連行ぞ。ア〜。めつそふな〳〵。そんなら金を。じやといふて餘りだ。何高いといふのか。ア申し〳〵。何と高いと申しませふ。誠に〳〵お安ふござります。そんなら金を今渡すかサア。夫は。連れて行ふか。サア〳〵サア〳〵〳〵〳〵。亡者に成て行く心か。ア、めつそふな〳〵。亡者に成てたまるものかいな。ア。何とせふしよ事がない。折角まふけた金なれど。命替りとつぶやき〳〵。財布の金と其儘に。地藏の前に差置て。左様なら是で五十兩。どうぞお連れなされぬ樣に。ム〜良きかな

〳〵アイヤ申。お前の聲はどふやら聞いた樣な。ムヽ夫々もしやお前はどしようでは。エイヤ。コレ。よきかな〳〵。さい錢變じて鰻となり。地藏變じてどしようとなる。最早我も歸るぞよ。歸る所を見るなよ。ハイ〳〵。見は致しませぬ。見るなよ〳〵ハイ〳〵見は致しませぬ〳〵。見るなよソリヤ見るは。ハイ〳〵。見は致しませぬ〳〵。ソリヤ又見るはハイ〳〵見は致しませぬ〳〵〳〵見ると一緒に連れて行ぞ。ハア悲しや何の見は致しませぬ。見るなよ〳〵。見るな〳〵と足早によしずの影に隱れ居る。ハイ。見は致しませぬ〳〵〳〵。ムヽハテナアコリヤマア。けふはどういふ事だ。マア但しは夢か知れぬ。夢ではないか。イヤ〳〵夢では有まい。カウツト先づ爰へ日の有内に來たは順禮の田舍娘をだまして賣て五十兩。懷へ入たはそれが嬉しさに一ぱい呑に往て戻つた所へ。しろう坊がうせやがつて。イヤアノ。お地藏樣がお出なされまして。五十兩取りくさつてじやないお上申まして。地藏はなくなるコリヤやつぱり夢かいな。アイヤ〳〵夢ではない證據が有る。こじやうに貸した金の催促せふと思ふて今日爰へ證文持てきた筈じやが。是が有れば夢ではない。ドミチツト有ぞ〳〵。併しこふ云時節なれば念の爲一寸讀んで見たいが薄暗がりで見えるかいな。よまればよいが。チツトよめるはず〳〵。エヽ借受證文の事。一ツ金子十兩借用申候處實正也然る上は其元殿入用の節何時にても返濟仕るべく候。後日の爲依て件の如し是があれば夢ではない何時でも十兩は取れるといふ物有難い〳〵〳〵アヽ證文〳〵〳〵。ハアコリヤやつぱり夢かいな。

新吉原の殿

入相の、鐘さへ早く暮れ果て、廓の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて今盛宮城野が、部屋は上品奥二階、簞笥長持鏡臺の埃取迄綾錦、福さなりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て。詞太夫樣御機嫌わへ、ホンニさつきに貸本屋が參じて、先度の曾我物語の次じやといふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴樣、今日

のお客は仲の町の茶屋から、〆から
んだ二人一座、宮城野様はもとより
お前も早ふ身仕廻して。オヽせわし
な、今身仕廻をするはいな、併し差
合な顔はないかへ。イヽエどれも
〳〵侍衆、一人のお方は器量よし
今一人は髯むつちや、目の大きい熊
か人かといふ様な、どちらへ札が落
うやら、いやな事ではないかいなと
何國の浦も客噂、そしるも廓のな
らはしかや。詞アヽコレ、そんな事
いふて遣手衆が呵ろぞへ。オヽ呵つ
たて、あたおかしい、イヤおかしい
次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱
へて戻らしやんした奉公人、おかし
い物いひではないかいな。サイナア
遠い國から姉を尋れて上つたとの話
し、宮城野様の慰みに、連てきてお
目にかけう、お前もお出と連立つて
行く後かげ見送つて。詞テモ扨も、
わざ〳〵獨り物いふて、マアよい氣
ではある程にの。コレ〳〵しげり、
そなた其處らかたづけやと、いひ付
る間もありやなし、新造二人が伴ひ
に、いやがる者をむり無体、突出さ
れたる田舍の娘、傍きよろきよろつ
ひに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興
さめ顔に。詞オヤ〳〵〳〵女郎さあ
達、人が癪そべつて居る處を、用さ
ア有來さらへと、二階さあぶち上て
こりやマア何たる所だ。どこもかも
光り申て、おしやくの櫛さあ見る様
に、塗こべえた箪笥さア、其上に夜
の物も金布たもじやア、蒲團も蕨放
染の色のよさ、私らアれまつたら、
あくとの胼さア引かゝつてうつ切
べい、おやつかなたまげ申す〳〵、
と言ければ、打轉る程おかしさかく
し。詞コレそこなお子、お前の故郷
國所、爰へどうしてお出た譯、咄し
て聞かさんしよば、お力さもならう
にと、なぶると知らずしく〳〵泣。
詞オヽやさしな詞おいやり申す、私
ら國さア奥州、だゝアやがアまに様
子有つて別れ申して、お江戸さあは
あらく盛る處だアと聞き、其うへ姉
さア此吉原の名高い女郎さアに成つ
て居さるとのはなし、女わらじの身
として敵ない思ひをして、尋れてく
るも、海山物語りの有事、聞いて哀
れを添てたべ。詞オヽモ何を言ふじ
やゝら、すつきりと譯が知れぬ、そ
して吉原で名高い女中を姉様とは、
雲つかむやうな尋れ物。サアそれだ

から頼み申すは。昨日觀音さアで目眼のおつかない人が、連て行つて逢はしてやらうと、籠さアに乘せてくる所を、是の御亭の世話さアに成り申して夕から居申す、脚かけ申すも他生の緣、ほんで御座るわよ、赤はらはたれ申さぬぢやア。ホ〜〜聞けばきくほどおかしい咄、そして今の赤はらとは、あられもないと若い同士、糖もくづる〜高笑ひ。知る人ぞしる宮城野が、押しづめて申しお二人、涙花の葦も伊勢の濱荻、所々でかはる物言、其樣に笑はぬ物。詞今あの子の言つてじや有つた、だ〜アやがアまといふはな、爰で言ふと〜樣か〜樣、又赤はらといふてじやは嘘はつかぬといふ事じやわいな、扨つてもがをれよふ御存じ。オ〜知つたもむりか憂臥は、夜毎日毎にかはる枕、心つくしの果は愚か、奥のとろくのお客にも、馴親しんだ身の一德。詞オ〜其のお客で思ひ出した、奥のお客がやかましかろ、私も追付けそこへ行く、先へお出でよい樣にコレ〜しげり、仲の町の井筒屋へ行ての、昨日の返事聞いておじや、早う〳〵と云ふ下から、遣手の政が例のしやぎり。詞奥のお客のお待かれ、何咄して居さんすぞいのう。オ〜せはし、そんならわしらも奥へ行て、御客選らみのえようもいばず、寢そべる度にア〜何やら、オ〜それ赤はらたれて氣に入つて、日がら頼もと口々に、いふて座敷へ行くふりを、見やる宮城野しのぶが傍。もしやそれそと摺よつて。詞さつきにからの咄しを聞けば、姉を尋ねる人さうな、奥州はどこらの生れ、何といふ所じやへ。詞アイ奥州は白坂近在逃井村といふ所。フン其逃井村といふ所に、與茂作といふお人が有らふかの。アイサ、其與茂作といふのはめらしがだ〜ア。そんならわしが妹と、縋り寄るを突退けて詞イヤ〳〵〳〵、がアまの常に云はしやるには姉さアの方にもしるしが有る、それを證據に名乘合ひ、委細心底打明ろと、云めした、それが有るなら早うつん出し、見せてくんされ姉さアとなつかしながら油斷なき。オ〜悧巧な人、疑やるも尤もと、立て箪笥の袋棚、襖開けばうや〳〵しう、淺草寺の觀世音、扉表具におしならべ、かざり置いたる筒守り、見るに妹も

疾く遲し、首にかげまく壷井の守。詞コレ〳〵、此姉が國を出る時か〻樣が大事にせいと下さんした、此守と〻樣は楠家の御涙人故、河内の國壷井八幡樣のお守、それを持つて居やるからは、妹じや〳〵、コレ〳〵、よう顏見せてたもいのう。オ〻姉さアでござるかいの、逢ひたかつたと諸共に、嬉しなつかし縋り寄り、外に詞は泣く計り。斯ぞいざや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎさに、來か〻る亭主宗六が、樣子有りげな部屋の體、忍んで事を立聞くとも知らず姉妹ひそひそ話し。詞オ〻、妹、よう尋れて來てたもつた、年端も行かぬそなた、と〻樣成と、か〻樣なりと、いづれぞ付いてお出であらう、もし道中ではぐれてかと問はれてわつと聲を上げ。詞ア〻コレ〳〵〳〵、斯うめぐり逢ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては濟まぬ、サアどうぞと、尋ぬる姉の心もそゞろ。詞エ〻遠國隔つた姉さアそれで何にも聞かないナ、だ〻ア五月田植の時分、代官志賀壷七といふ惡侍に。ヤアヤア〳〵何といやる打切れてお死にやり申した。ヤアと悔り差込む癪。詞とつともウ惡い時そしてどうじや其跡は、サアおらだけもすでの事殺さる〻所、庄屋の伯父が駈つて來て、りきんでみても肝心の、證據なければだ〻アは犬死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならすすごら〳〵、そんだの言號の御亭にも對面はしたれども、是も此江戸さあへ歸り申す、跡はおらだけとがアまとばかり、賴ない身に下地の大病ヤアお煩ひでもあつたかいの、シテ御本復なさつたか。イエ〳〵六月十六日に悲しや終にお死にやり申したヤア〳〵御養生も叶はなんだか。ハア、話しさあ聞いてさへ、そない歎かつしやる物、じきに見さらへたおらだけが心、エ〻コレ、泣かつしやるは道理だければ、賴に思ふ姉さア又病氣おこしては猶か濟ない。イヤ〳〵、イヤ〳〵、中々煩ふ樣な事じやない、そしてどうじや〳〵。サアなじよにもかじよにもおらだけ一人庄屋の伯父さまが引取つて、奉公しろと云ひめすけど、何の奉公所かい口惜いさくやしいで、跡先思はず且那寺へかけこんで、詞坂東順禮するといふて、笈摺もらひ國元を、つ〻

走つたもそなたに尋れ遇たら、姉妹心一致に仕申して、だゝアの敵が討ちたいばかり、道中すがらの艱難もそなたにあはふが樂しみに、詞がいに苦勞とは思はなんだ、併し逢ふたらかつぱりと、しよつ骨が拔けた樣な、コレそない歎かつしやる手間で妹はるゝ〳〵尋れて、よう來てくれためこがめらしといふてくんさい姉さアと、あやも泣き入る稚氣に、長の旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野に、つゞくはすゑの松山を、袖に浪越す涙なり。歎きの中も姉は猶、妹が脊を撫おろし。詞か、其樣に思やるも尤も、併しそなたは父母に、長う添やつた身の果報、此姉を見やいのう、年貫にせまつて、さゝ樣は、水牢、其苦を助けうばつかりに、コレ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年、そなたは五ツ子顏さへ見知らず、さゝ樣の御最期や母樣の死目にも、逢はぬといふ悲しい不孝なはかない事があらうかいの、斯うした事とは露しらず。此妹は健なか知らぬ、さゝ樣か、樣お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらふ物、便のないを杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮氣を窘んで、勤め大事と言號の、殿御の事も、そなたの事も、戀しなつかし思ふのを、たのしみ暮したかひゝなう名乘逢ふたは嬉しいが、悲しいはなし聞く姉が、心も推してたもいのと手を取交はす姉妹が、涙々を立聞くも貰ひ泣して立わけの、暖簾もぬるゝばかりなり。つもる話は富士の山かず〳〵多き涙の隙。詞こんな事聞ふはしか、借て讀んだる曾我物語、兄弟の人々も、終には父御の敵討、コリヤ泣いてゐる所じやないわいのアゝ是肝心の事を忘れてゐた、此姉の言號の夫、此江戸にゐやしやんすとの話し、其お方の名所、定めて覺えてゐやらうのう。そりやせはしさに、何も聞かない。オゝモそれを知らぬといふ事があるものかいの、そふいふ事なら敵の顏も。それ知らな

いでよい物か。目眼のでつかな鼻のひらたい男ぶり。モウよい〳〵壁に耳、御涙人こそなされたれ、由緒たゞしい武士の娘。オヽめらし姉妹じやてゝ、おのれやれ敵討いで置かうか、オヽよういやつた、出かしやつた、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れて此家を立退き、さうじや〳〵と妹が帶しめ直し我身も共に、小褄かいしよげ身ごしらへ、立退かんとする所を、暖簾引切かけ出る亭主。コリヤどこへ。オヽ且那様のいつの間に。おりや最前から、アいや、たつた今爰へ來た、か、わがみ達は敵、サアかたい約束の男が有る故、こゝをかけ落、コレわるいぞや〳〵、そしてマア其田舍娘を知つて居やるか、アイ、イヽエ。知るまいてい〳〵、昨日淺草でかゝへて戻つたわいのう。且那様、私らが今の咄し。サア聞いたでもなし、聞かぬでも。それ聞かれたら敵さぬと、突出す懐剣、さすがの姉妹、鏡臺の、鏡追取りてう〳〵はつし。詞ヤ何と違ふた物か、違はぬ物はそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移る二人の顔、似たりや似たり、花あやめ杜若、其五月雨のくらき夜に、敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、おれが讀んで聞かそう、光陰おしむべき時、人を待ざることわり、日間行駒つながぬ月日重なりて、一滿は十三歳に成にけり。詞ナ此道理、河津の三野祐重といふ有名る勇者、大名の息子殿でさへ、五ツや六ツの比よりも、思ひ立れた親のかたき、なみ大ていの事でなければ討れぬ者じやコレマ聞きや、大名の後室共云はれる人が、曾我の大郎祐信殿へ、二度の嫁入せられたも、謀、又息子の箱王丸を、いとしなげに坊主にせうと言はれたも、敵工藤祐經に油斷させう爲計り、其年月の憂艱苦、詞無念口惜い事の有るぢやう、是迄、何ぼも芝居の狂言に取組んでして見せる繼爺の祐信殿も大名、役に立ずの貧乏人と、後ゆびをさゝれたも兄弟の子供衆に、實父の敵が討せたい武士

の意氣地、こりや是陰德と云ふ大義心、其上鬼王床司左衛門といふて、伊東家の老臣が有つて、幼少な子供衆に、晝は終日劍術稽古、夜もすがら机の上、忠孝の道を敎へ、成人の後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乘らしたも、北條殿といふ烏帽子親が有つたさかい、近いたとへば、おれが樣な不粹むくつけな親方じやと思ふてたもるし、こつちも又抱の奉公人じやと思へば、何事によらず引けを取らしとむないアゝこんな事は昔はいでも知れた事じやが、今の樣な咄しを聞けば、おりや見遁したいく、コレ爰をよう聞きや、首尾ようそなたが逃果てからが、悲しい事は遠國生れ、しつかりとした心當もなうて、江戸中をうろつきやるを、內人の者共が見付、何所そこにゐますといふ事を聞いてアゝ、ゑいわい打捨て置けとは、親方の身でどうもいはれぬ、そりやモわがみ達計でもない、此廓へくる奉公人に親孝行が、夫のためでない物は一人もない、あれも孝行じや、これも貞女じやと、それなりけりに仕廻ふては、こつちもおやま商賣取置かればならぬ、おれに成人の息子でもあつて、抱の新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、ヤイ極道めぼいまくつてのける勘當じやと、强異見する親の身が、人樣の大事の息子殿が見えると、きやつ放錢じやわいの、コレ賴もしさうなお客じや程に、隨分大事にかきやと、智惠を付る、マ此樣な得手勝手な商賣はなげれど、こりや是浮世の身過世過、さういふ身分な此おれでも、慈悲と情といふ事は、不斷心に忘れはせぬ。マちよつといふて見樣なら、此惣六は最前いふた、鬼王庄司左衛門じやと思や。外に烏帽子親の北條殿といふ樣な、後楯でも出來てから、ヤさつきの樣に思ひ込んで、突かゝつた懷劍、おれにさへつい擲き落される樣な事では、まさか敵に出合ふた時すつぽんの間にも合ぬほどに、おれがいふ詞に隨ひ、コレ〳〵此道をも

稽古して、鍛錬の熟した上では、ぐつと〳〵と尻持つ合點。コレ欠落の尻もつて行かふとはいふまい、急ぐ所ではない程に、大事の勤め、欠落しようとは無分別、お客大事に勤めてたも、合點がいたかと、つど〳〵に、曾我物語の引くゝり、讀切講釋一方を、頼もしげある亭主なり。二人は飛立つ忝涙、身にも胸にもあり餘。エゝありがたう御座んすと、姉が拜めば、妹も、只伏拜む許りなり。詞ゝ嬉しいのは尤も、義を見てせざるは勇なし、わがみ達の樣な奉公人見立て、召かゝへたいや、仰山なが、おれが目鐘もおよそ違はぬ、禮いふ事も何にも及ばぬノ。是人の目鏡に悟られぬ樣、隨分共げはひ化粧も美しうして奥の座敷へ、ソレ遣手の政はゐぬか、湯をもつて來てやれいやい、しげりはゐぬかと呼出して、言ひ付るのも賣物に、花も美もある轡の惣六。生粋の淀まぬ座敷は大騒ぎ、率頭末社が彈く三味に乗つて呑むやら飄ふやら、現たはひの喜見城、意見上手の親方が、こもる情に宮城野が、妹を部屋に奥座敷引別れてぞ、三重〆入にける。

中　奥州安達原

敷妙使者の段
矢の根の段
袖萩祭文の段

敷妙使者の段

中　竹本相生太夫
　　豊澤猿糸

矢の根の段

次　竹本大隅太夫
　　鶴澤道八

袖萩祭文の段

切　豊竹古靱太夫
　　鶴澤清六

この浄瑠璃は寶暦十二年九月の竹本座に初演されたもので近松半二、竹本三郎兵衛、竹田和泉、北窓後一等の合作で全五段物です。後三年の合戦を主題に平兼盛の『陸奥の安達原の黒塚に鬼こもりといふは誠か』の古歌を潤色したものです。環宮守護の役を承つてゐる謙杖直方に二人の娘があり、妹は八幡太郎源義家の妻に、姉娘は安倍貞任の妻になつて姉妹敵味方に分れてゐたのも奇しき運命ごとで、八幡太郎に亡ぼされた安倍頼時の二子、貞任、宗任は親の仇とあつて弟は南兵衛といふ下郎に扮し、兄は桂中納言敦氏になりすまして、環宮の御所に忍び義家を覗ふが謙杖は環宮御行方不明の言解に自刃し、兄弟は義家にそれと看破されるが義家の寛仁大度に戰場で再會を約して引別れる。貞任の妻袖萩は盲となつて親謙杖のもとをたづねますが其處に親子恩愛の熱情が溢れ出で涙を流させます。

（床本）敷妙使者の段

心の内こそ哀なれ平の黛杖直方環の宮の御行衛知らぬ鼠紫のほとゝぎす夏去り冬のいつしかにすでに今年の日の數も春待ばかりかれ瑣り枯果つる庭の檜皮ぶき落葉の軒をふきかか

人形

敷妙御前　吉田扇太郎
謙杖直方　吉田玉次郎
妻濱夕　吉田小兵吉
外ケ濱南兵衛實は安倍宗任　吉田玉松
桂中納言實は安倍貞任　吉田榮三
娘袖萩　吉田文五郎
おきみ　桐竹紋司
八幡太郎　吉田光之助
仕丁大ぜい
腰元大ぜい

へて殿間の女中仕丁もなく老の忠義の一筋に竹の園生の侍もつもる白髪に雪折れて妻の濱ゆふ只二人夫婦の人なんいまぞかりける椽先に立出なふ殿お年寄の雪ふりに庭に出て何なさる寒氣が入ふにもふおはいりちと火にお寄さきり炭のぜうに成まで女夫合サレバ〳〵宮様行方なく成賜へば此御所は明屋敷我々夫婦が斯様に御番は致せ共肝心の主なければ玉の御殿も鳥の塒と成果今日なども宮おはしますならば仕丁共に木の葉の雪を拂はせて御遊びなされうものをとふと思ひ出して子供の眞似する雪なぶり天地の中にさへましまさば奪なひ返して此恥辱ゝがんものと心は雲にも入りたけれど都の中を身動きなられば空しく胸をいろ斗り不便なは娘敷妙日本の智者と呼るゝ八幡殿に連添ながら不覺を取た此親殿夫の手前恥かしく嘸肩身がすぼらふとそも此春より一夜さも實にれた夜はおじやらぬと奥齒もれくるまばら聲アゝよござりまするはいの弓取の不覺と言ふは軍の中の憶病こりやほんの災難敷妙が事おつしやるに付て思ひ出すは姉娘の袖萩親にもしらさず忍び男を拵へての家出憎いやつと思ふたも早一昔其時はまだ十六の後先なし年も行たればさぞ今頃は悔しう思ふて居るであろどこにうたへ居る事ぞエヽ又姉めが事ぐど〳〵とア思ひ出すも穢はしい不孝者といはふか武士の家の不義放埒再び顔も見まじと思ひしにまだ業が見てぬやら朱雀堤の橋の上でエヽ橋の上で何とした

へサアいや何ん共せぬたとへ橋の上でのたれ死しをらふが不便な共思はぬお身は又何とぞ思ふ氣かイヽエ何とも存じませぬヲヽ身共は結局心地よく思ふはいと口は憎てい身を背け物事つゝまぬ夫婦中涙一つは隱しあふ腰元共が取次の間敷妙様御出と娘ながらも案内は武家の行儀の表門、遉親子の中座敷ヲヽ此頃は便もなし心地でも悪いかと謙杖殿も案じてじやによふおじやつたサアヽ爰へテモ美しう髪結やつたと子供の様に思ふは母アヽイヤ申けふ參つたはお見舞ではない謙杖様へ夫八幡太郎義家が使者でござりますムヽハテかはつた表向きの用事ならば家來は越さでそなたを使者とはアヽコレヽ奥だまりやれ何にもせよ使者と有ば娘は内證いざお使者御口上の趣承はらんと有ければ義家申越仔細瑕の宮お行衛なき事御かしづきの謙杖殿誤り據なく日延の日數も今日限り若も言譯なきにおいては罪を正す義家が役鞏舅の容赦は致さず勅諚を以て取圍敵味方と成申さん其時必ず遺恨にばし思されな其爲申遣はす使者の口上あらヽ斯の通りでござんすと語る中より謙杖直方いそヽ立て一間の内柳箱に鈦つたる籏と思しく携へ出扨々八幡殿は天晴仁有る大將かな元來某は平家八幡殿は源氏鞏舅と成は希なる事とそちを嫁らした其時より鞏引出に赤籏一と流れ遣はし八幡殿より此白籏一流れ取かへて所持せしは兩家合体の其印此度の我誤りに付ては言がいなき舅よしなき緣を組しよと思はれんは必定大方娘と緣切て此籏を取戻しに來るで有ふ若去られたら其思ひはいか斗りどふぞ此白籏のやはり此家に止る様にと此頃神前に据置毎日祈るかひ有て今日娘を表向の使者として差越れし八幡殿の心底たとへ鞏舅敵味方に成迚も敷妙は去ぬと有情の謎老人が心を察し心づかひの御親切逢ては禮も言はれぬ義理お使者歸つて申されふは仰越さるゝ越き一々承知仕る委細の心底は對面の上申聞んお出を待と傳へられよお使者大義と式禮も弓矢の面裏門口八幡太郎參上と白衣ながらに入賜へばコハいつの間にと敷妙も不審立そに立母親此頃絶し一家の參會お茶よお菓子と賑々し直方邊に目をくばり懷中より一通取出し親い中にも

胸中を斗り兼ね今日迄は聖殿にも包しが宮の御行衛尊ぬべき手がゝりといふは此狀契約の如く環の宮を密に盜出しくれよと畫の内侍へ賴の文体名は誰共なけれ共必定安倍の賴時が餘類貞任宗任兄弟の族奪い取て儕れ等が味方を集る柱にせん爲さあれば御命に別條なしと心の安堵はしながらも言譯立ぬ身の落度我心を推量有ホーウさこそ／＼我推察も其ごとく此程奥州より捕へ來る鶴殺しの科人つら魂尋常ならず肩口に二つの瘤是こそ兼て聞及ぶ目印疑ひもなく安倍の宗任一人は手に入しが今一人の貞任此兩人さへ捕なば宮の行方明白たらんと則彼宗任を此館へ引せ來る禁庭の御沙汰なき中に詮議肝要たるべしと力を付くる時しもあれ桂中納言樣御出也さしらすればソレ氣遣ひ私の内意か勅諚か女儀は次へと改むる座席に心殘れ共母と娘は立て行く。

（末本）矢の根の段

娘は立て行く中納言教氏卿衣冠の秋にかほり來る雪より出でて雪より白き白梅一枝小四方に取乘せ持參ある謙杖には此間公の御ふしん蒙り嘶心を痛められん鬱氣をはらす此梅まだ冬籠の枝ながら進上申す此花と諸共喜悅の眉を開かれよと直方が前にさし出し義家朝臣のおわするも、彼詮義の一條ならん殊更親しき一家の中御心底さつし入るコハ卿の御詞とも覺えず一家は一家政道に依估なき義家詮義の手がゝりになるべき科人先達て捕え置くヤアヤア義家が家來共鶴殺を是へ引けと呼はり給ふ一聲に鶴の科人出おらふと權威の下部は蠅虫と見下て破布子の繩付ながら眼中威勢備つて實に大將と大將の見參とこそ見えにけれ鶴を打つたる科人外が濱の南兵衛とは假の名奥州の住人安倍の賴時が次男宗仕とも言はるゝ勇士夫れ程のへろ／＼繩引つ切は安かるべきに態と下部に引出きるゝは義家に鬱憤を言はんず爲な聞て得させんサア何と語れいかにとのたまえば是は又思ひがけもない。そんなむつかしい名は生れてから聞いた事もござりませぬ博奕打の南兵衛に違ひなければ元よりお前樣に勿体ない鬱憤とやら一分とやらきなかもかけ値は申ませぬ兎角命が惜しいばつか

りどうぞお慈悲に繩をいて下さりまぜと泣かぬ計りの白々しさ〳〵然らば儕座の匹夫下郎に違ひないなコリヤこの族を見知つて居るか是こそ我父伊豫の守奥州追討劄の折柄押立て給ひし白旗其時宗任が親安倍の頼時大將めがて放ちし矢先れらひはづれてこの旗に請留即時に踏折捨てられし其矢の根はコレサ爰にムーテヘハ〳〵〳〵頼時運が拙き運にて源氏に敵對叶はぬ事今にも其餘類あらば却つて敵の此矢を以て斯の通りとてうど打つ鏃は庭の手水鉢じろりと見やつてヤ是は扨危ない事をとそらさぬ顔敎氏卿連み出でよし手練は兎も有醫誠の宗任なり共匹夫下郎に等しき男大望の企思ひもよらず奥州の果に生れ草木の名も知らぬ鹿猿同然の族斯云が無念成ばコレ此花の名を知つつるかと白梅取つて指出し東夷の目にはよも知まじ知つたらば云て見よやと嘲弄ある宗任ぐつとせき上南兵衛と云ふ下郎でござれば花の名はいかにも存ぜぬ併そふおつしやる敎氏卿も以前は流し者に合て配所の島守やう〳〵此頃めし返されかむり裝束かけたれば逆正眞の山猿の冠相手になる口は持たぬ身が返答はコレ斯と傍に立たる件の矢の根口にくわへて我れと我かた口つんざく血汐の紅何かはあやも白族に鏃の筆のざら〳〵と文字あざやかに染なすば東夷の名にも似ぬ三十一文字の言の葉に座も白梅の枝折て冠傾き見へけるがムー詞爭ひむやくしと和歌を以ての返答我國の梅の花とは見つれ共大宮人はいかゞ云らんホヽ面白し〳〵我に歌を詠かけしは返歌せよとの事ならん去ながら最前汝がいふ如く此敎氏は父の卿諸其幼少より嶋へ趣き鄙に育ちし恥しさ雲の上に座を列ながら我さえも得詠まぬ歌を斯く即席に詠叶へし器量骨柄問に及ばず安倍宗任に違なしア言はれぬ歌で蛙は口から我と我手に白狀せし淺はかさよと一言に勝色見する梅花の頓智術に乘じ無念の宗任口にくわへし鏃の手裏劍大將目がけ打返すをてうど留たる源氏の白梅ホーウ尤こふこそ有べけれ生捕るも捕るゝも時の運命恥とな思ひそ猶此上に義家が尋問ふべき仔細有こなたへ引けと引立てさせ奥の間さして入給ふ敎氏傍を打詠め謙杖が傍近く扨々心づかひさ

つし申す未だ育譯の筋も有ざるやハツア夫故にこそ心を痛め罷有ホヽさこそあらん夫に付今日貴殿に心ざしたるこの梅はまだ寒中に室にて温め咲せし花天の自然に有られ共春を待得て咲く花より早き詠めを人の賞翫又散る時も其通りしぼみかぢけて見苦しうならぬさきに此枝の如くさつぱりと切れば却つて香も深し花に限らず身にも又切り時が大事左樣には思はれずやム、御心深き此一品ちりかゝつたる老の枝切れと給はる天の賜花物云れど御謎に白梅の腹切刀慥に落手仕るハヽ天晴明察大江維時なんどいふ譏者の嵐に吹き散されぬ其先に花は三芳野人は武士名を後の世に散らさぬ樣の思案ぞあらまほしけれと梅に飼を匂はせとしづ〳〵立て入にける。

（床本）袖萩祭交の段

只さへ曇る雪空に心の闇の暮近く一間に直香白梅も無常を急ぐ冬の風身にこたゆるは血筋の縁不便やお袖はとぼ〳〵と親の大事と聞つらさ娘お君に手を引れ親は子を杖子は親を走らんとすれど雪道に力なく〳〵たどり來て垣の外面にアヽ嬉しやたれも見咎めはせなんだのイヽエ門口に侍衆がれふつて居やしやつた間にチヽ賢い子じや謙杖樣は此春から主のお屋敷にはござらず此宮樣の御所にと聞てどふやらかふやら爰迄來事はきたけれど御勘當の父上母樣殊に淺ましい此形で誰取次でくれる者も有まいお目にかゝつて御難儀の樣子がどふぞ聞たやとさぐればさはる小柴垣ムヽ爰はお庭先のしほり門戸をたゝくにもたゝかれぬ不孝の報ひ此垣一重が鐵の門より高ふ心から泣聲さへも憚つて簀戸にくひ付泣居たり謙杖は斯ともしらず垣の外に誰やら人聲アレ女子共はおらぬかといひつゝ自身庭の面外にはそれとなつかしさ恥しさもまた先立ておほふ袖萩知らぬ父明けて悔くり戸をびつしやり何の御用と腰元共濱ゆふも庭に立出て謙杖殿何ぞいのイヤ何でもない見ぐるしいやつがうせおつてアレ腰元共追出せばゞあんなもの見る物でないこつちへお來やれ〳〵と夫の詞は氣も付ずマ何をきよと〳〵言つしやるムヽ犬でも這入ましたかと何心なく戸を明けてよく〳〵透せば娘の袖萩は

つとあきれて又ばつたり娘は聲を聞知れど母樣がとも得も言ず母はかはりし形を見て胸一ぱいにふさがる思ひ押さけ〳〵定めない世と言ながらテモ扨も〳〵〳〵思ひがけもないアヽコレ〳〵ばゞ何いやるイヤさあやつばり犬でござんしたほんに憎い犬め親に背た天罰で目も潰れたな神佛にも見離され定て世に落果ておらふとは思ふたれど是は又あんまりきつい落果やう今おもひ知おつたかと餘所にしらすも涙聲樣子しられば腰元共さつても慮外な物もらひなら仲間衆にはもらはいでお庭先へむさくろしいとつとゝ出やとせり立られハイ〳〵〳〵どふぞ御了簡なされてまちつとの間ハテしつこいと女中の口々ヤレ待てくれ女子共ヤイ物もらひおあしがほしくばなぜ歌を諷はぬぞ願ひの筋も何なりと諷ふて聞せと夫の手前ちつとの間なと隙入たさあいと言へど袖萩ぢゝ久しぶりの母の前琴の組とは引かへて露命を繋ぐ古糸に皮もやぶれし三味線の罰も慮外も顧ずおれがひ申奉る今のうき身の恥しさ父上や母樣のお氣に背きし報ひにて二世の夫にも引別れ泣潰したるめなし鳥二人が中のコレ此お君とて明て漸十一の子を持てしる親の恩しらぬ祖父樣ばゝ樣を慕ふ此子がいちらしさ不便と思し賜はれと後諷ひさしせき入娘孫と聞より濱夕が飛立斗り戸の透間抱き入たさ組たさ祖父もかばらぬあひたさを隱してわざとさがり聲ヤアかしましい小歌聞たふない女共も奥へいてお客人に付て居よ、サ皆往け〳〵イヤサばゝ何うぢ〳〵早く畜生めを擲き出して仕廻やれさアヽコレ腹立は尤なれど夫は餘りハテ扨隙入る程爲ならぬ武士の家で不義した女郎め擲き出すとはまだ親の慈悲長居せばうぬぶち放をふか親の恥を思ふて名を包むはまだしもと思ひの外今さなつて身の置所がなさの詫言恥顔もかまはずよくうせたな但は親へ顔當にわざと其形見せにうせたかにつくひやつさいかりの聲袖萩悲しさやる方なくなん〳〵のせいもん勿体ない去りながらそふ思し召も御尤大恩を忘れた位我身ながらあいその盡た此体お詫申したとてお聞き入が何の有そりや思ひ切てはおりまするお屋敷の軒迄も來られる身ではなけれ共お命にかゝる一大事と聞

て心も心ならず顔おしぬぐふて參りました不孝の罰で目はつぶれる此子をつれて爰の軒では追立られかしこの橋ではぶち擲る〳〵憂目にあふても此身の罪にくらべればまだ〳〵業の果し樣が足ぬとモ未來が猶しも悲しい此上のお願ひには娘のお君お目見へと申すは慮外只の非人の子と思し召たつた一言お詞をおかけなされてくだされと歎けばお君も手を合せ申旦那樣奥樣外に願ひはござりませぬお慈悲に一言物おつしやつて下さりませと言馴れし袖乞詞に濱夕が可愛や〳〵〳〵な子心にさへ身を恥て祖父樣共ばゝ樣共得言はぬ樣にしをつたは皆儕が徒故畜生の樣な腹から見事犬猫も產をらず生れ落ると乞食さす子をアレあの樣におさなしう產付ざまは何事ぞあんまり憎ふておりや物が言れぬ〳〵とむごう言のはかはいさの裏の濱夕幾重にもお慈悲〳〵と泣ばかり謙杖猶も聲あらゝかヤア親が難儀にあはふがあふまいが女めがいらざる世話同じ兄弟でも妹の歎妙は八幡殿の北の方と呼るゝ手柄姉めは下郎を夫に持ば根生迄が下主女めと恥しめられてわつと泣ノチ下主下郎とはお情ない夫も本は筋目有侍黑澤左中とは涙人の假の名別れた時の夫の文に筋目も本名も書てござんす是見てたべと差出すを取次紙のはしくれも詑の種にもなれかしと思ふは母より直方が讀文体の奥の名に奥州安倍貞任とはなむ三賓扨は貞任と縁組しかと心もそゞろに懷中の一通取出し引合せば扨こそ同筆ハアはつと斗り當惑の色目を見せじとずんど立ヤア穢はしい此狀彌以てあふことならぬサア奥こちへハテぐずつかずと早おじやれと尖い詞にせがまれて母もぜひなく立て行なふコレ暫しモウ逢ふとは申ませぬお身の難儀の其譯をどふぞ聞して下さりませ申〳〵と延上り見れど盲の垣覗き早暮過ぐる風につれ折から蚓にふる雪に身は濡鷺の声垣や中を隔る白妙も天道樣のお憎しみ諸し身はいとわれど樣子聞れば何ぼでもいなぬ〳〵と泣聲も嵐と雪に埋れて聞へぬ父と恨み泣次第〳〵に降つもる寒氣に肌も冷切ば持病の癪の差込でかつばと轉べばお君はうろ〳〵さする脊中も釘氷涙かた手に我着物一重をぬいで母親に着せてしよんぼり白雪

をすくふて口にふくますれば漸々顔を上げチヽお君もふよござる此又冷る事はいのそなたは寒ふはないかやイエ〳〵わたしは温ふござりますチヽよふ着て居やるかドレ〳〵ヤアそなたはコリヤ裸身着物はとふ仕やつたそいのふアイ餘りお前が寒からふと思ふてハヽア親なればこそエヽマ子成ばこそわしが様な不孝な者が何としてそなたの様な孝行な子をもつた是も因果の中とてだきしめ〳〵泣涙絶兼て垣越に襠ひらりと濱夕がチヽさつきにから皆聞て居る儘ならぬ世じやな町人の身の上ならば若い者じやものの徒もせいじやそんなよい孫産んだ娘ヤレ出かしたと呼入て、聟よ嬶と言べきに抱たふてならぬ初孫の顔もろくに得見ぬは武士に連添淺ましさと諦て逝でくれヨヽこいふ中に奥濱夕と呼聲にアイ〳〵そこへ參ります娘よ孫よもふさらば可愛の者やと老の足見返り〳〵奥へ行く折しも庭の飛石傳ひ雪明りにうかゞひ寄安倍の宗任戸を引明ればアこはと立退お君をじつとさらへコリヤこはいことはないそちが伯父の宗任じやヤア宗任様とは夫貞任殿の弟御チヽついに逢れど兄嫁の袖萩殿アヽそんならお前に問たら知るであろ夫婦別れる其時に夫に預けた千代童は息災で居るかいなチヽ其千代童はの傷寒で死だわいのエヽイハアチヽ歎きは理り何かに付て一家の敵は八幡太郎こなたも兄貞任殿の妻ならば今宵何とぞ近寄て直方が首討れよエヽイアノとヽ様をチヽ生置てはヽ我々が大望の妨げコレ此懐劍でと手に渡す難題何と障子の内曲者待と大將の聲に怕り折あしくそち〳〵と忍ばせて胸をすへてどつかと座し繩引切て逃出んと存ぜしに見付られたは天命と腕押廻せば義家公繩には有で眞紅の糸結びし金札宗任が首にさつくと打かけ賜ひ網にもれたる鱗を助くるは天の道康平五年源の義家是を放つとナソレ其札此上もなき關所の切手日本國中を放しがいと仁者の詞にハアはつと雪に頭は下なから庭の善悪閉隱す氷を踏で別れ行夫の最期を濱夕が白梅の腹切刀三方に乘る露涙外にも同じ袖萩が死より外はなくなくも歸る戸口に父謙杖餌しつかと座に直り、三方取て覺悟の矢の根取とはしらぬ袖萩が娘に見せじと突込

懷劔はつと驚き取付お君聲立させじと抱しむれば母は夫が片手に押へまた女めは逝おらぬか氣强くは言ふ物の年寄たれば何時しれぬ聲成共よく聞て置とそれとは言ぬ暇乞とは露程も秡萩が扨はお心和らぎしかゝう成果た身の上どふで追付のたれ死是がお聲の聞納めでござりませうと親と子が一所に死とは神ならぬ障子おし明立寄敎氏母はかけおりヤアそなたは自害しやつたかコレ謙杖殿も御切腹エイアノとゝ樣も娘もと一度に驚き轉びおりあきれ涙にわかちなし手負を見屆け中納言眞任に緣組れし御邊所詮死で叶はぬ命袖萩とやらんも死ずば成まいハゝア健氣なる最期天聽に達し申べしと冠高くしづ〳〵と心殘して立出る衣紋に薫る風ならであやしや聞ゆる鐘の聲コハいぶかしと主戻りあたりに心目を配る一二の對の屋隈々に太皷の音の喧しハテふしぎや此明御殿に陣鐘を打立るは何者成ぞとふり返る一間の內より高らかに八幡太郎義家是に有奧州の夷安倍眞任に見參せんと立出賜ふ御大將つゞぬてかけ寄る二人の組子弓手妻手へはつたと蹴飛しヤアう心得ず柱中納言敎氏を眞任とは何をもつて。ホーウ此義家天眼通は得ざれ共過つる大赦の砌り柱中納言なりと名乘來る曲者つく〳〵面体を窺ふに我稚き時見覺し安倍賴時にさも似たり扨こそ眞任に極まつたり宮の御行衛十握の寶劔をも取隱し猶二色の御寶を奪ひ親も根ざしの大望を達せん工みサあらがはれぬ證據は是と白旗を取出し賜ひ最前汝か弟宗任と別れ程へし兄弟の對面梅の花によそへてかけたる謎早くも悟つてナコレ此歌我國の梅の花とは見つれ共とつゝれし上の白梅の花は花の兄我國とは我本國奧州の兄ならんと兄弟一致の血判に白旗を穢し源氏を調伏此上にも返答あるやサゝゝゝ何と〳〵と差付られ眞任無念の髮逆立エゝ口惜やなア我一旦涙人となつて都の樣子を窺ひしが官位なくては大內へ入込れずと涙人赦免の折を幸ひ嶋にて死せし節氏と偽り始て逢た舅謙杖に腹切せしは詮義の種の一通をサ取らん爲所詮我謀むなしくなれば親の敵八幡太郎運を一時に決せんと太刀に手をかけ詰寄ればハゝアせいたりな眞任汝獅子王の鬱ひ有共斯八方に敵を

受けサ遁るべきや又其方が一命は宮寶劔の御有家白狀する迄助け置命ながらへ父頼時の弔ひ軍は又重れて弓矢の情は相互ひ夫婦の操も節儀は一ツ貞心厚き袖萩が最期の際に暇乞となさけの詞に袖萩がノチなつかしの貞任殿最前からよふ似た聲とは聞ながら六年ふりで廻り合顔見る事も叶はぬか死る今はにどふぞして此眼が明たいコレお君さゝ樣のふと稚子を見るに遁がの貞任も俱に血を吐く親々が恩愛の涙ばら〳〵〳〵大將あはれみ思し召し、親の緣きれたるお君義家が子に養はんと仰に謙杖有難涙いかなれば某は敵と味方を聟にもつ因果も思ひめぐらせば代々不和なる源平を先祖に脊て緣組だ我誤りを白旗の此白梅を血に染て元の平家の寒紅梅娘父上イザ一所に聟殿さらば我夫さらば謙杖殿かゝさまのふと別れの涙母の濱夕稚子も一度にわつと濡る袖御大將も直垂の袖射削つて餘りの矢先竹に忽ちすつくと宗任最前見遁し歸りしは兄弟本意を遂ん爲優曇華まさりの親の敵サゝゝゝ勝負〳〵と詰かゝるを貞任暫しと押とゞめ晉の豫讓は衣をさく此白幡をまつ此如く手に取ば八幡が首提げんは案の內敷妙の身には大切な夫婦の緣を繼目の旗ソレ大事に召れ濱夕と渡すは舅の幡天蓋ひるかへしたる梅花の赤旗奥州に押立〳〵父頼時が弔ひ軍一先此塲は宗任來れハツア實尤兄者人雪持笹は源氏の旗。竿一矢射たるは當座の腹いせ首を洗ふて義家お待ちやれチゝ〳〵互ひに勝負は戰塲〳〵先夫までは桂中納言敎氏卿御苦勞そふと式禮におさらばさらばと敵味方ちやくする冠裝束も故郷へ歸る袖袂雁の翅の雪の上母にわかれて稚子が父よと呼ば振返り見やる目元に一時雨はつと枯葉のちり〳〵嵐心弱れど兄弟がまた取直す勇聲よるべ涙に立かれて幾重の思ひ濱夕が身にふる雪の白妙になびく源氏の御大將安倍の貞任宗任が武勇は今に隱れなし。

次　戀娘昔八丈

白木屋の段
鈴ヶ森の段

白木屋の段

竹本文字太夫
野澤勝平

人形

親庄兵衛　吉田玉次郎
娘お駒　桐竹紋十郎
髪結才三　桐竹政龜
下女お芳　吉田文之助
丁稚三太　吉田榮三郎
佃屋喜藏　吉田玉幸
番頭丈八　吉田榮三

安永四年九月に初演された松貫四、吉田角丸の合作です。實説となつてゐる江戸新材木町白子屋の娘お熊が、關れたる愛慾の葛藤から罪を犯し享保十二年十二月二十五日鈴ヶ森の露と消えた事蹟を脚色したものです原作は七段物になつてゐます。お熊が引廻しの時に上に黄八丈の大格子を下着に白無垢髪は島田で薄化粧した美しさは浮世繪から脱け出したやうだつたと書殘されてゐます。

（床本）白木屋の段

鹿オドリいふもさらなる繁華の地、人の心も國がらに、自然と廣き武藏野の、月日もしげく立つゞく、家居隙無く諸國から、入込む人と出る人と、出家侍諸商人、百萬石もけんべきも、摺違ふたる繁昌は、金の生る木の植所、角引廻す家立や、所久しく住馴れて、人の思はく財産も、堅い商賣白木屋と、門に印の杉ならで、軒に並ぶる材木は、幾年經りし老舗なり。主人庄兵衛は日外より引籠つたる目の病ひ、店を預かる丈八がもたれかゝつた幌箱に、勿體つける番頭顔詞コリヤ小僧よ、通り町の尾張屋へ往て、今朝の小割と貫十挺の代金、只今つかはされませと、此書付もつて請取つて來い。ソレ又芝居へ這入て居るな。アイ〳〵合點と云捨て、とつかは急ぎ走り行く。後

鈴ヶ森の段

竹本南部太夫
野澤吉彌

人形

親庄兵衛　吉田玉次郎
同女房　吉田玉七
娘お駒　桐竹紋十郎
髪結才三　桐竹政龜
番頭丈八　吉田榮三
代官提彌藤次　吉田玉市
番太　桐竹紋太郎
番太　吉田玉德
奴角内　吉田萬次郎
奴平内　吉田覺三郎
見物大ぜい

には一人丈八が、滅多無性に飲む煙草、雁首傾け思案顔。思ひ内にあれば色勝る憂き思ひ、屋敷の勤いつしかに、思ふに別れ思はずも、呼び返へされし親の内、今宵の事の氣にかゝり、若其人の來よかしと、表の方へ立出る。姿ちらりと お駒様々〳〵詞申しちよつとこちらへお出なされませ、アヽ今夜は聟様がお出ぢやげにござりますな、へヽヽヽヽ嘘ぞお嬉しうござりませうなア、ほん〳〵にあたお目出たい、アヽあたいま〳〵しい事でござりますわい。アノまアほんに嬉しさうな顔わいの。エヽ丈八の何にいやる、私やそんな事聞きたうない、耳が穢れる穢らはしい、聞えませぬはさゝ様かゝ様、わしが心にどの様な、義理約束があらうやら、問ひ談合もある事か、事を好みしなされかた、斯う云ふ事を露ほども、知らせたい聞かせたい、どうせうぞいのどうせうと、目には涙の玉あられ、我身にうけて丈八が、首筋元からじいわ、じわ〳〵〳〵〳〵詞ハアヽわれは包むと思へ共、穢に現はれしかへこれはしたり、ア面目ない詞これ迄も幾度か、モウ云うか〳〵と口迄はぞろ〳〵出たけれど、云ひ出しかれてをりました、どうぞお前に夢になとしらせたいと思ふから詞マア〳〵番頭様共云はれる身が、コレ淺草の地藏様へ、七日が間跣足まゐりを致し、またハイ申し申し地藏様エ、私が因果でござります、何卒此懲叶ひます様にと一心かけて願ふたらサア、地藏様の

御利生と云ふ物は、イヤモとんともお
爭はれぬ物ぢや、お前樣が私に夫程
心中立、今夜の聟が嫌ぢやとはコレ
嬉しいぞへ、添いぞへ、コレ〳〵私
やさつきにから手を合して拜んでば
かり居りますわいな。エヽ何のこつ
ちやぞいの。なんのそなたにあほら
しい私が立つるはついこゝらに、コ
ヽついこゝらにア〳〵、エヽ矢張お
れぢや〳〵、己より外に誰も男はな
いもせぬ物、夫に又近所の若い者の
噂にも、アノ白木屋の娘はきよとい
物ぢや、あいつはマア脊はすらりと
高し、器量はよし、色はくつきりと
白し、アヽ白い子ぢや、白子ぢや、
アリヤ白木屋ぢやない、白子屋のお
駒ぢやと云いやんすぞへ、マお前そ
れ程に仇名する評判娘、そつちから
も氣があるとはエヽ添い難有いと
めつた無性に嬉しがり、手ほめうぬ
ぼれ有頂天詞丈八殿〳〵、おかみさ
んが召しますと、呼び立てられて詞
オイ〳〵エヽとんともどんな事では
あるわいコレお駒樣、まだ云ひ殘し
た事がある、後に〳〵と目と仕方、
しすまし顏で走り入る。お駒も胸へ
さしのぼる、癪を押へて奥へ行く。
すぎはいは實に剃刀の刄を渡る、オ
三も今は主親に、捨られ果ての髮結
の、一日所定らず、忙がしさうに
ちよこ〳〵走り、下女のお菊が手に
持つた三寶拭き〳〵詞コレ髮結殿、
小僧殿を呼びにやつたに、つい來て
くれたがよいわいな。サア直に參じ
ませうと存じましたが、お向の稚の
月代、何が彼の例の髮惜しみ、漸し
まふてたつた今、ハアさうして旦那
にはどちらへぞお出でなされますの
でござりますかへ。イヤどこへも行
きやなされぬが、今夜こちのお駒樣
に、聟樣がはいる故、大抵忙しい事
ぢやない。エヽ、ナヽ何とお仰有り
ます、今夜内かたのお駒樣に聟樣が
アノそりやお前ほんかへ。オヽ此人
わいの、なんの其樣に惚りする事が
あるぞいの、ヤほんにお駒樣もこな
樣に直して貰ひたい、早う呼んで來
てくれと云ふてゞあつた、ドリヤ知
らしませうと入にけり。見送る才三
が思案顏詞ハテ合點のゆかぬ、これ
迄のお駒が親切、浪人の身を色々と
世話してくれた志、夫に今夜の聟
入は、ハアヽこりやとうから性根が
くさつてあるわい、エヽさう云ふ事

とは夢にも知らず、だまされたが口惜しい、もう此上は破れかぶれ、云ふて〳〵云ひやぶらうか、アいや〳〵〳〵大事をかゝへた我身の上、アゝ兎にも角にも世の中の、變り易いは人心、ハテどうがなとゝつ置いつ、胸はもや〳〵立つ居つ。お駒は下女が知せをば、聞くと心は飛立てど、そらさぬ顔に一ト間より詞ガゝ髪結殿、さつきにから待かれて居たわいのと、後先見廻し詞才三樣、ヘエ逢ひたかつた逢ひたかつたと取縋り、譯も涙にあやもなき、取て突退け睨みつけ詞なんぢや逢たかつた、なんのまあおのれがあれに逢たかろ今夜郎の來る事も、何も彼も聞いて居る、言譯も何も聞かぬぞ、見下げ果た畜生め、犬め、狐め、狸め、よう人をばかしたな、ものを云ふも穢らはしいと、胸倉とつて引しやなぐり、踏んづ叩いつ突飛し、睨みつけたる目に涙、お駒は顔をふり上て詞思ひがけない今宵の樣子、聞かしやしたら腹が立て、嘸ぞ憎からう去乍ら、そりや聞えませぬ才三樣、お前と私が其中は昨日や今日の事かいな屋敷に勤めた其中に、ふつと見初めた恥かしい、戀のいろはをたもとから、そつと私が心では、天神樣へ願かけて、梅を一生斷つたぞへ、其お蔭やら嬉しい返事、二世も三世も先の世かけて、誓ひし仲ぢやないかいな、今宵の事をしらせまし、間談合もせうものと、待かれてゐるものをあんまり酷い愛想づかし、たゝいて腹が癒るならば、心任せにした上でもう堪忍をしてやると、云ふてたんのうさせてたべと、男の膝に縋付き餘所を憚る忍び泣き、眞實見えていぢらしい。才三も今さら手持なく詞さう云ふ事であらうとは、おれも思ふて居たれ共、今宵郎が來ると聞き腹の立つたもそなたが可愛さ、我とても此樣子、姿をやつし苦勞をするも、紛失の茶入をば、尋れ出したい斗り、と云ふて何處を尋るあてどもなし、それ故にそこ愛と、所をかゆる町髪結、何から何迄そなたの世話眞實な氣は知つてゐる、ヤもう堪忍してたも、こらへてたも、コレ人が見りや惡い、ヤサ泣顔しやんな、泣きやんなと、脊撫さすれば娘氣の、そんなら疑ひは晴れたかへ、オウ嬉しやと抱付き、割なき仲ぞ睦まじし。

奥の障子をそろ〳〵と、探り出でたる親庄兵衛詞藤七殿々々〳〵來てぢやないか、オヽ大儀々々アヽ晩にはちつと客もあり、月代が剃つて貰ひたいソレ娘よ湯を取つて來てくれと、何氣なけれど氣味惡く、うぢ〳〵もぢ〳〵手盥に、汲んで來る間に剃刀を合す目と目に見えわかぬ、親は白髮の月代と、倶に氣をもむ顏と顏、云ひたい事も口なしの、離れ難なき二人が心詞サアマア〳〵〳〵髮もよいわ、頭はどうなと束れて下され、ヤコリヤ娘よ、ついて乍らちよつといふて聞かす事がある、コヽヽ爰へ來い〳〵、扨てまア碌々に得心もさせず、今夜の聟入、親甲斐の無理我まゝと、定めて恨んでもいようし、又若い者の事ぢやによつて、エ、エなんぞかうそこらにむつちかくちや〳〵とした事もあるものぢや、けれど爰をよう、ヤ髮結殿、こな樣も餘に居る不祥ぢや、ちつとの間ぢやと思ふて、聞いて下され、元わしも腹からの町人でもない、去るお屋敷に勤めて居たが、若い時の後先なし、色と酒とにつかひ果たし、お手討に極つたを、御主人の若旦那御誕生のお祝ひに、奥樣が命乞ひで、何事なうお暇下され、トントモそれからはうん〳〵流浪の中、緣でかな此家に手代奉公、前の親旦那が不便を加へて下さつて、ヤ何にコリヤ跡をやる男の子でもなければ、幸ひ娘にわれを娶合し、此家督を讓るほどに、隨分商ひ精出して、位牌所を潰さぬやうに、又娘が事賴むぞよと、他人のあれに身上をほつかりと下さつた大恩、アノそちが母は女房とは云ひながら、マヽヽヽおれが爲には、アリヤ大事の御主樣ぢや、おのれやれ遺昔の通り家に疵はつけまいと、身を粉に碎いて精出しても、サア時の天災は遁れぬ、此前の大火事にころりと丸燒、あつちこつちする中に引負に合ひ、かけにはとられ、其上五年前からナコレ目を煩ひ、とう〳〵內瞳と云ふものになつて、何から何迄左りまへ、間屋の仕切も不埒になりアこれはマどうせうぞいと思ふた所アノ今夜來る喜藏と云ふは、元は知らぬが近年の出來分限、講釋場でつい近付になつてから、念頃にしてくれて、ノ、マヽヽヽ間屋の諸埒も付けたがよいと、金放り出してくれた

其時は、アヽ若い人ぢやがテモ親切な人もあればあるものぢや、マ何かはしらず添いと悦んでゐる矢先、おれをひそかに内へ呼んでな、斯う身を入れて世話するも外ではない、そちの娘お駒を女房にもらひたいとのつ引ならぬ云ひかた、イヤと云や金戻せと云ふぢやわい、モどうも仕様模様もなく、マヽヽヽ心得たと突延し、一寸遁れにだまして置いて、その中にはおのれやれ金濟ましてと思ふに任せぬ世間の不景氣、この月の差入から、金を戻せといら立の催促、エなんのべちに、いつそ此屋敷諸道具も賣代なし、親子三人着のまゝ、出て行かうとは思ふたが、サ爰をよう聞てくれ、あの女房を路頭に迷はしては、過ぎ行かれた親旦那のお位牌へ、どうも顔が逢されぬ、マせつない所ぢやぞい、サ其せつない所ぢや程に聞き分けて、コリヤ娘此親が手を合す、ヨ、どうぞ今夜の所を機嫌よく素直に盃してくれい。ヨヨ、最前ちらりと二人の樣子、サ聞たでもなし又聞かぬでもない、水の流さ人の行末、お歴々のお方でも賤しい業をする者も、コリヤ辛抱の一つぢや皆己やよう呑込でゐる、いやぢやあらう〳〵と察してゐるが、爰又一番親が頼みぢや、ヨコリヤ娘どうぞ辛棒してくれと、義理と恩愛百千筋、からまる胸の白髪の親父、恥も厭はず見えぬ目に、餘る涙の痛はしさ、娘は始終聞くにつけ、勿體ないとは思へ共、思ひ切られぬ身の因果、なんといらへもないじやくり才三郎も俱涙、詞事を分けてお仰有る事、一つは親御へ御孝行、お前樣の心の内はナ、呑込んでおりますほどに、マアあいとお仰有りませ、サア〳〵、申し、サヽヽヽ、アイ〳〵と一言が百千萬の憂き思ひ、身を震るはして咽び泣き詞かゝ〳〵よう得心してくれたな、イヤモ嬉しい〳〵アヽ何これ藤七殿、こなさんもいかい世話でごんす、コリヤ娘よ、親や夫婦の爲には、勤奉公さへするぢやないか、ハテ此金の濟迄の事ぢやと思ふてな、盃さへして給ふたら、それからはわれが身持次第ぢや、先第一朝は持起されて、昼時分に起きて朝飯を喰べ、夜は又大勢人寄して何時共なう夜を更し、弊めが云ひ居る事をつべこべ〳〵と口答へ、小遣

錢は湯水つかふ樣にどつとゝまきちらし、ソレ忘れても針やなど手にさるなよ、ぼろそ引ずらうがだんないわ、見ぬ顔して居い、ヨ、毎年する八百屋お七の狂言、二た親が片意地から、あたら娘を火放けにして、今の世迄も浮名を流す。アリヤアレ娘子ばかりへのみせしめぢやない、世間の偏屈な親にも、手本にせいとの見せしめぢやわい、これを思へばお七が親の久兵衛も、定めて何ぞ深い義理、アゝその身にならねばしれぬが浮世、髪結殿、大儀娘後にとしほ〳〵と、心を思ひやむ目より、見るめいたはしうはべには、見えれど見ゆる子故の闇、親の心の内瞳やみとぼ〳〵奥へ入にけり。見送る目さへ泣きはれて、ものをも云はず二人共、抱合ひたる俱涙、理りせめて哀れなり。表に繁き雪踏の音、人こそあれと耳に口、後に〳〵と兩人は、奥と勝手へ別れ入る。早黄昏の店さし時、くれぬ中より箱提灯、立派に出立つ細身の脇差、無論勿体のむれくそ髷、花鞍風のつくだや喜藏、丁稚が案内に主の庄兵衛、目は不自由でも覺えの店、探り出迎ふ饗應ぶり詞ヤこれは〳〵奥殿嘸今晩はお取込みでござりませう。ア扨て先づ何かの義お得心下され我等も大慶、此祝言が調はれば、いやながらお取かへ申した金の催促、それでは折角取續いた此城木屋の家を遺してしまふ樣なものぢや。かれこれと氣の毒に存じたが、マア〳〵今晩の内祝言で物事が丸う行くと申すもの、かう申せば、マなんとやら如何なれど、仲人も金、ナ金づくめにして參る拙者、アかう申せばいかゞなれど、此城木屋の内にはちと過ぎた鞍樣、ヘゝゝイヤかう申せばいかゞなれど、此喜藏が聟になれば、城木屋の財産は萬代不易と云ふものぢや、さうではござりませぬか、奥殿さ、扇子ばち〳〵身をふかす、むつとはすれど詞コレハ〳〵丁寧な御挨拶、そなたからお仰有らいでもしれてある借用金併し金の借貸は相對、金で娘は進ぜぬぞや、さサゝいへばもの事に角が立つ、マア〳〵夫はほつておいて座敷へござつて、娘やかゝにも。いか樣左樣致さうさ、互の底に一力身イザ、御案内と勝手から、出る手代の丈八が詞ヤア鞍と云ふは。コリヤ

〳〵サ〜〜〜コリヤ、いかにも聟は此喜藏、何にも云ふな〳〵。ハアコリヤなんでござりますか。アノ爰なお手代かな、いかにもこちの番頭丈八と云ふ者でござる。ム〜いかさま呑込のよささうな、サ〜〜〜コリヤ〳〵呑込みのよささうな、お手代殿ム〜ぢやがマ〜〜〜〜變つた所で逢ふたなあ。ヤア聟殿、何んといはしやる。アイヤかはつた〳〵、サ舅殿にかはつて、今から此喜藏が、此内の旦那樣ぢや、サ、此内の旦那ぢやによつてこれからは、おれが目をかけて使ふてやるは、旦那へ手代が始ての目見得、コリヤこれを祝儀にしつかりと、渡して置くと、内懐から取出す、ふくさ包を手に渡し詞ソレ祝儀ぢや納めておけ。アイヤこれ〳〵聟殿、何も心遣ひさつしやるな丈八、ソレようお禮をいやれ。アヽいや〳〵禮も何にも言ふ事はない、ナ何にもいふな、後にゆるりと舅殿マア奥へいて。いかにも〳〵詞サア〳〵ござれと打ち連れて、一間へこそは入りにけり。見送る手代が小首を傾け詞ハテ扨てめんようなアノ喜藏めは、去年の春吉原で茶入をかたつた仲間内、いつが間にやら、ムテモマアあらい出世をひろいだな、夫はさうと此包んだものは、コリヤマア何やぢ知れぬて、ヤアこりやはれ其時騙つた凱歌の茶入、ムヽアヽこれをおれに渡したは、あいつが素性を云ふてくれなと賴みの心、アヽムヽそいつはマアいふてくれなら云ふてはやるまいが、云はずにおれが默つて居ると、アノ娘を彼奴が女房に、ヤこいつはつぼぢや、ハアヽコリヤマアアヽどうしたらよからうぞいつそ此茶入の事代官所へ訴人せうか、イヤ〳〵マア〳〵おれが身からしてあやが拔けぬわい、こいつはどうぞよい思案がありそうなものぢやが、ガヽ夫れよ、アノ娘を連れて爰をついとするが上分別、ムさうぢや〳〵と打うなづき、暖簾おし上げ入りにけり。奥は今宵の稀人と、勝手ばばた〳〵膳拵へ、笑ひの聲もつらき身に、傍見廻し娘のお駒は奥よりぬつと丈八がお駒さん〳〵チヽお駒さん、そこにかいなアあいたかつた〳〵エヽこの人はいのなんじやいの私しにびつくりさしやつたはいの〳〵〳〵どころかいの〳〵、サア

〳〵〳〵身ごしらへをさんせいの〳〵ムウ身ごしらへとはなんじやいの。なんじやいのとは曲がないむこめがばつをせしめぬ間におまはんを連れて此家をかけ落サア〳〵早よふと言ひつゝしのびの身ごしらへ、幸傍に人はなしコレ此ひまにつれてのき野々末山の奥でなと二人ひつそり暮しましよ。おまはんを女房にするならばたとへからだは捨られて引まはしにあふとてもだんない〳〵コレだいじない。ヱゝ此人はいの何昔やる私しやどこへも行事いや。何じやどこへも行く事いや。そんならやつぱり此家でおれを且しゆにする氣じやの。ヤそんならまたんせ、しよがあるこふなはれ〳〵いつそ聟めをころりといはしたれはゞからぬおまはんと女夫。こんなゑにしが唐にも有ろかとけつかるはいアハゝゝゝ何をきろ〳〵しなまんすぞ、こふなはれ〳〵今奥へいて何じやのふ。マアれどころで盃ごと、其酒に毒を入あいつころりとやりさへすりや。あとばらやまぬといふ物じやい。おりや一はしり生薬やで何でも毒を買てくるそれをかならずかんなべエ。わすれておまはん呑んすなドリヤ一走りと表の方一人呑込みかけり行く。何をいふのも氣はそゞろ夫の爲と帶引しめ心を定め奥の方行は女の操ぞと捨て一間へ急ぎ行く。

（床本）鈴ヶ森の段

三重〳〵急ぎ行く。人の身の捨所とか、名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所

青竹にて矢來を構へ、あたりにきらめく拔身の鑓、けばれぬ役人馳違ひ科人今やと待ちかけしは、此世から成る地獄の責、いまわしくも亦た恐ろしゝ。あはれ見に寄る諸見物、あすこや爰に立集り、何んと此科人もモウ來さうな物ぢやなア、おれは牢屋を引き出すと直ぐに通町へかけぬけ、それから河岸へ廻はつて、以上四度見たが、扨て美しい娘ぢやわい、あれをころつとやるといふは、あつたらものぢや無いのかいの、アイヤ〳〵何んぼ顏が美しうても心は鬼ぢや、丙午ぢやあるまいし、男を殺すといふことが、どこの國にもある物ぢや無い。オイ〳〵〳〵左樣一圖に云はしやんな、女も男を殺すとは、モ、よく〳〵堪忍のならぬわけ

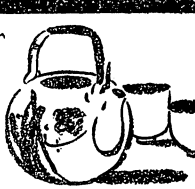
ありや密男、オツトどつこいしよ、や密女房事で有うも知れぬと、噂取々口々に、あんまり待つて寒なつた白水の茶屋で一ぱいしやうサア〳〵ござれと打連れて、皆々かしこへ走り行く。子を思ふ闇より闇に目も分かず、只さへ暗き父親の、手を引く妻も諸共に、涙に見えぬ道筋を、現ともなく走るとも、夢路を歩む心地して、やう〳〵かしこにたどり着き見れば厳しき竹垣に、さも恐ろしき抜身の鑓、あれで我子を殺すかと、思へば氣も消へ心消え、わつと斗りに泣き出す 詞 コレ〳〵嬶、爰がモウ鈴ケ森か、今のそなたの泣き聲は、モウお駒は殺されたか、コレ〳〵早う聞かして下されと、問へば女房が涙聲、イエ〳〵まだ娘は來やせぬけれど、厳しい構へを見るに付け、可愛い娘を殺すかと、思へば胸もはりさく苦しみ、私は身も世もあられぬと、歎げゝばいとゞ父親は、オヽ道理ぢや〳〵はやい、今朝も門を引かれると聞いた時、かけ出て會ひたう思ふたれど、近所の衆にとめられて、内で泣いてばかり居たわいのう、今日が親子一世の別れ、せめて最期の暇乞、又一つには娘めが、云ひたい事もあるならば、聞いて迷ひがはらしてやりたさ、お主の爲とは云ひ乍ら、花の樣なる子を殺す、おれが心を推量しや、こんな事知つたら、あらゆる神や佛樣御信心申たら・ちつとは利生もあらうもの、外に佛へ願かけたら、難行ぢやと思召し、娘を救ふて下さるまいと、如來さまばつかり念じて居たのが、今では悔しい、未來は奈落へ落つる共、娘が命助け、下され南無如來樣、なむ如來殿、エヽ如來め、サヽヽヽヽ斯う云ふがお腹が立たば、どうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げます、と、愚に歸つたる親心、母は猶更正体無く、オ三どのが盜まれし、茶入とやらが出るならば、助かる筋も有らうかと、夫斗りを樂しみに、けふよあすよと待つ甲斐も、情ない今日の今、死ぬる娘が心の内、思遣つていぢらしい。病み煩ひて死んでさへ子を先立し親の身は、悲しうてならぬもの、蝶よ花よとなでし子を、科人にして殺すとは、モ、よく〳〵前世の因果かと、狂氣の如く身を悶え夫婦手に手を取交はし、絶え入り消

え入る憂き涙、餘所の見る目も哀れなり。跡をおひ〳〵下女男、ヤア旦那様、おかみ様、歎きはお道理さり乍ら、御怪我があつては猶ほ大事、マア〳〵おいでと手を引いて、暫くかたへに介抱す。思ふ事、叶はねばこそ憂き事の、懸と義理との諸手綱二上り不愍やお駒は夫の爲、かゝる憂き身の縛り繩、首にかけたる水昌の、珠數の數さへ消えて行く說教屠所の羊のあゆみより、はかなき身ぞと觀念し、力無く〳〵引かれ來る。代官堤彌藤次お駒に向ひ詞最前屋敷にて、役人中より申渡されし如く、仔細あるとは云ひながら、假にも夫を殺したる科は遁れず、重き刑にも行はるべきを、お上の御慈悲を以つて、死罪に仰せつけらるゝ、まつた今生にて申殘すことあらば、何によらず云ひ置けよ、彌藤次よきに取り計らはん、有難う存じ奉れと、云ひ渡せば、顏を上げ詞何事も皆な私が心でかゝる身の罪科、露いさゝかもお上へ對し、お恨みはござりませぬ、有難う存じますと、覺悟極めし健氣さに、不愍と見やる諸役人、涙紛らす斗りなり。お駒は顏を振りあげて詞御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人、さぞ憎いやつ、大膽者徒ら者と、皆様のお憎しみも有うけれど、云ふに云はれぬ譯あつて、夫殺しの科人と、死恥さらす身の因果不愍と思し一遍の、御回向願ひ上げまする、世上の娘御様がたは、此駒を見せしめと、親の赦さぬ徒らなど必らず必らず遊ばすな、エゝ可愛い夫へ義理立てば、二親に歎きをかけまた親々へ從へば、言ひ交はした夫へ立たず、果は斯うした淺間しい、此世からなる劔の山、身を切裂かれ憂恥ぢを、さらす、定まる因緣づく約束事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る兩親の、もしや群集のその中に、見えはせぬかと伸び上り、伸び上りても竹垣の、透間がくれの人群れに、目も泣き腫れて見え分かぬ、心を思ひ諸見物、濡れぬ袂は無かりけり。群集押分け兩親は、竹垣に取つき縋り、詞コレ〳〵お駒や、さゝ様も此母も、親子一世の暇乞ひぢやもの、來て居いでよい物かいのう〳〵。コレ〳〵嬶、さぞや此頃の憂苦勞、娘が顏も、アゝ痩せたであらうな、どう様にして居る

事ぢや、エヽおりや顔が一目見たいわい〳〵やい。イヤ〳〵、わしやこな樣の目の見えぬのが羨しい、見すぼらしい娘の形なり、見て居る母が此の胸は、裂けるわいのと、どうと伏し、前後不覺に取亂す詞と、樣、かヽ樣、よう來て下さんした、わしや逢ひたかつた、逢ひたかつた〳〵わいなオヽ逢ひたい筈道理ぢや〳〵、親父殿や此の母より、まだ〳〵そなたが逢ひたう思やるアヽコレ〳〵かヽ樣、もう云ふて下さんすな、聞く程戀しい床しいお人の、お顏が目先にちら〳〵と、片時へんじも放れぬわいな、放れぬわいな。私がこういふ心から、お年寄られたお二人へ、どんな歎きをかけまする、必らず〳〵泣かずとも、娘でも何んでも無い、アリヤ前生の敵ぢや、憎いやつ不孝者と、思ひ切つてぶつゝりと、歎きをやめて下さんすが、少しは冥途の罪ほろぼし、私が死んだその後でも、必らずくよ〳〵思ふて、煩ふて下さんすなへ。ソレ〳〵其樣にしほらしい、孝行なこと言ふてたもる物、くよ〳〵思はいでかいのう〳〵、何の跡に片時も生きて居られう、二人乍ら追ひつき、未來で逢ふはいのう。アコレコレ申、其樣におつしやる程、私が身に罪が重なる。申かヽ樣、今のお人が見えたなら、私が事は是非も無し、どうぞ賣を詮議して、御出世なさるを冥途から、樂しんで居りますと、よういふて下さんせい。エ。エ。まだ其上氣にかゝるは、私が死ん

しずりぎに席即・店北・
理料御席即・店南・
電話新町二四六二番
仙寶
牡町

だ後にても、彼のお人が爰へ來て、淺間しい形を見やしやんしたら、ひよつと愛想が盡きようかと、私や、夫ればかりが悲しいと、今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを、思ひやりつゝ二親は、前後正体打ち倒れ、せき上げ〳〵叫び泣き、音は濱邊に打寄る、涙に波ます涙なり。果しはあらじと下部共、時刻移ると引立てる、二人の親は竹垣に、隔てられたる親子の分れ、見物群集は口々に、宗旨〳〵の手向草。折もこそあれ才三郎、丈八に繩をかけ、群集押分け矢來の内、御預けの茶入の盜賊、喜藏に紛れなき由、此丈八が白狀故、再び茶入も我手に入り、又た喜藏丈八兩人は、此の才三郎が親の敵、お上へ委細申上げ、お駒が命赦免の狀、御披見あれと差出せば、彌藤次取つて押ひらき詞成程々々紛れなき赦しの趣き、親の敵であるからは、喜藏丈八兩人は、才三郎に心任せ、お駒は直ぐに兩親へ、御赦免成るぞとありければ、はつと計りに庄兵衛夫婦、夢に夢見る心地して悦び涙ぞ道理なり。お駒が繩目とく〳〵と解けて結びし戀娘、千代も變らぬ御惠み、重れ〳〵て黄八丈、昔語りぞ今こゝに、傳へ〳〵し筆の跡、世々に傳へていちじるし


大及御池橋
茶
電話新町二大二二番

赤坂並木より古寺迄

彌次郎兵衛　豊竹つばめ太夫
喜太八　竹本鏡太夫
和尚　竹本文字太夫
親父　豊竹富太夫
仙松　豊竹千駒太夫
竹本龜久太夫
野澤勝市
竹澤團六
豊澤猿太郎
鶴澤友衛門
鶴澤清二郎

切
喜太八
彌次郎兵衛
道中膝栗毛
赤坂並木の段より古寺の段まで

この浮瑠璃は十返舍一九の名作「東海道膝栗毛」の趣向をそのまゝ脚色したものでこの段の内容は彌次郎兵衛と喜太八が赤坂並木で失敗し喜太八は寺へ遁げこんでゐると彌次郎兵衛が死人の姿で尋ねて和尚に愚弄されるがそれは悉く狐に化されてゐたといふ面白い彌次喜太道中記です。

（床本）
赤坂並木の段より古寺まで

（謠）〽いでや此春の景色の麗におふさきるさの稀人も袖ふりはへて面白や（狂言）是は關の東に住む喜太八彌次郎兵衛と申者にて候扨も此度都方を一見せばやと思ひ立て候殊更けふも早日くれて道を急ぎ候程に宿を取らばやと存じ候（鹿ヲドリ）東路をいつしか後に三河路やあた二川も打ち過ぎて歩むに馴ぬ旅づかれ物岩穴の觀世音御燈のかげもほのぐらき御油の宿をも出放れて並木原にぞ着にける。喜太八かたへに荷をやつとこさとおろしアヽヤレ〳〵〳〵くたびれた〳〵此マア彌次樣は何をしているんだろアヽ早くくればよいにナア後の茶店で聞けば何でも此松原にはわるい狐も出るとの事だがアヽくらさはくらし提灯はなし何だかうそ氣味のわるい事だなア

人形

彌次郎兵衛　吉田榮三
喜太八　吉田文五郎
和尚　吉田小兵吉
親父　桐竹門造
悴仙松　桐竹紋司

此彌次様はなぜ遲い（ナゲブシ）わらじが切れたか門止かと後を見やりつ延上りまつ毛をぬらす後よりも彌次郎兵衛は喜太八がかれての憶病知つたればおごしてやらんと小隱れし思ひ付たる狐の面手拭のはし引結び顔へすつぽり引かぶりさし足抜足後よりアイ。アヽ申し〳〵御免なさりませ〳〵〳〵わるい狐とは申しませぬよいおきつ様でござります御免〳〵といふ聲ははの根も合ず膝がた〳〵彌次郎兵衛俄に作り聲ヤイ／＼〳〵ヤヽラヤイノヤイヘイ〳〵ヘイ〳〵〳〵のおへヽらへイのヘイ〳〵〳〵儕憎い奴、けふもかごかき共が錢を一本ちやらめかし酒肴をおごりし事よもや忘れはしをるまい。アヽ申々お前様はよふごぞんじでござりますなアほんのそれはでき心慾氣ではござりませぬアヽイヤ〳〵〳〵ぬかすまい〳〵まだ有る〳〵塩井川では故もなき座頭の肩におぶさつて川を渡りあまつさへ座頭の買つた其酒を盜喰ふコナ横道者めがア申々其かわり尻が割れて酒代は皆わつちが拂やしたから其勘定は濟で御せエやすぬかすまいまだ有〳〵日坂の泊りでは信濃みこのばゝアが所へ夜這にうせ佛壇の中へすててふてんのてこなとおつこちた其騷ぎを儕が連の佛の樣な彌次郎兵衛にぬり付け儕はぬく〳〵しらぬ顔重々の不屆者めが其かわりには是をくへと傍に有り合ふ馬の糞杖につゝかけ差出せばエヽ其馬のふんを私にチイノエヽいやか、じやと申して夫れがマア、喰れば連行くサ

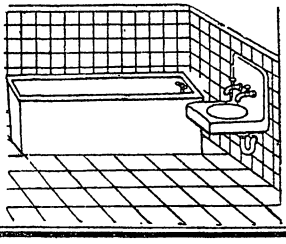
アうせいアヽ申し〳〵実は私のお袋が今わの枕元へ私を呼コレ喜太公やたとへどの様な事が有つても馬のくそだけは喰てくれなとの遺言で御座りやすどふぞ此儀は御了簡ムヽ然らば此以後汝が連の彌次郎兵衛が申す事何によらず背きはせぬかハイ〳〵何にも背きは致しませぬムヽ夫なれば此荷物を汝が荷物と一つにいたし赤坂の泊りまでかついで行けアヽサア早くかつげいアイサア早く持て何をうち〳〵するぞいやい行けといはゞ行かぬかハイ只今まいりますはいのと荷物取上げつく〳〵見てチヤ此荷物は私が連の彌次様の荷物によふ似た様なとこは〳〵眺めるなりそぶりヤアおまへは彌次様じやないかテモ扨もひどいめにあはしたのといへば彌次郎兵衛吹き出しハヽいいいハいいいいべら棒めいかに憶病じや迚餘りだ〳〵ハヽヽヽハヽヽヽヽイヤマウ彌次さん餘りおめへの事ちやれいか悪いしやれだぜ只さへおつかれエと思ふて居る所に思ひがけなふアイと言はれてイヤモウ〳〵〳〵あつたら肝をひやし物にしやしたハヽヽヽヽ喜太公〳〵サア〳〵〳〵氣けんを直して早ふ赤坂へ居て泊ふ〳〵そんならそふしよふサア是からは二人連だこはい事も何にもないぞヤイ狐め出て見やがれエヽおいらアお江戸は神田八丁堀九尺二間の城廓かまへ十二文で汲す水戸の水でみがき上げた喜太八様とはおらがこつたいたれだと思ふエヽつがもれエコレサ喜太公ごふきに力むじやれエかそんなに力むと又今のアイアヽコレ〳〵〳〵御めんだ〳〵エヽ何のこはいと思やこはしこはくないと思やごふしたと、猫おつかれエやこんな所に長居はおそれサア〳〵行かふと兩人が荷物を一荷にさしになひんとこさどつこいしよ〳〵〳〵

松竹キネマの
朝日座

たけぬはず映画部

坂はてる〳〵鈴鹿はくもるエ〜喜太公てめへも何かやれよおれは今おどろかされて聲もなにも出やしれエやそんな事云はずにやれよ笑つちやいやだよ何笑ふもんかいそんならやろよ土山間の間の土山雨がふるハ〜〜うんとこさどつこいしよアーコウ〳〵彌次様〳〵アノ向ふの方に何だかコウ白い物がちら〳〵見えるはアリヤマア何だ有ふなムーアレカアリヤらいとものちんちよふよナニ大黒様のちんちくりん何をいつてやがるんだい弔の提灯だエーそんなら爰は墓所かエーきびの悪るい何だかコウ首筋がぞつ〳〵とする様だエーコリヤ折りわるふ又雨じやいま〳〵しいとつぶやき〳〵行先へちよこ〳〵〳〵と小坊主が形にも似ざるばつてう笠徳利片手に歩みくるそれと見るより喜太八がソリヤこそ出たは化物じや彌次さんゆだんせまいぞやとぶる〳〵ふるへば彌次郎兵衛幸ひ有合ふ天秤棒腕に任してぶちのめせばアイタ〳〵〳〵アレ〳〵とゝやアイ誰かひどいめにあはせるはヤイトいふ聲聞き付けかけくる親仁此体見るより怕りし彌次が胸ぐらしつかと取り此悴には何とが有つてかはいそふにぶちのめした有様にサアぬかせ聞かぬ〳〵とせちがへば喜太八見るよりこりやたまらぬゆるせ〳〵と一さんに後をも見ずして木の根につまづいてひざぶしすりむいて赤い血を流してこすり〳〵逃て行くヤイ〳〵〳〵コリヤチイ喜太八おれ一人を残して置て逃るとは胴慾じやエヘ〜〜〜〜是は〳〵おとつさんで御座りますかエーお前のお子様共存じませず只化物じやと心得まして打ましたは大きな麁相眞平御免下さりませイーヤ聞かぬ〳〵折角買にやつた五合の酒雫も残らずこぼして仕まいちいさい者をむごらしうひどいめに合

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六一二七六九
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

はせたなどぐつと締ればアヽ申し〳〵マヽヽそれでは咽の佛樣がだいなしになります。ちよゆるめて〳〵下さりませ五合のエヽ酒がこぼれたとは五合どうだんお氣の毒に存じます代は私が出しますから一升のお願ひかん貳升とおつしやつてくださりませきつとお禮に三升いたし升から四升いはずと御了簡五升でござり升エヽしやれ所かいアヽ御腹立は御尤疵養生代にはかうやく代を出しまするからどふぞ赦して下さりませムヽ夫なれば赦してやらふサア金出せハイいくら出しましよナチヽ命がはりには安いけれど十兩にまけてやるエヽ十兩とんだ事おつしやります十六文のかうやくを百貝付けても一分であまるどふぞ二歩にまけて下さりませイヽヤなられエ二歩がならざ三歩インヤそんなら四歩エヽしぶといやつじやならぬはい〳〵夫じやおまへできない相談じやいヽ値じや高いちとまけれエムヽそんなら十兩の内を一兩まけて九兩わいエヽ十兩の内を一兩まけて九兩とは面白いハヽヽヽしかし間夫代でも七兩二歩はあたりまへぢやエヽヤア知らざ半分値さどふぞ夫で御了簡とはどんなあたいムヽ五兩にまけいか五兩なら安いものじやがまけてやるはサア金よこせエヽエヽサア金よこせエヽ現金かへ知れた事じやハイ〳〵〳〵只今勘定いたします〳〵エヽかふとエヽ私が咽のいたいくるしみが〳〵あけて四九八九と四九卅六匁と八九七兩二歩と五兩の金を差引して三兩と六匁お前の方からおつりを下さりませエヽさま〳〵のたは言モウ了簡がウヌならぬわいエヽ又じや〳〵又しまつたアヽ申し金上げます〳〵實は道中が物そふで御座りやすから金は胴卷に入れて腹にまいてございますおとつさんお前さん一寸手を貸てお

冬の寒さを溫かい

南一溫泉料理へ

獨特の泉溫で爽快な氣分に
美善を竭す客室一で盡を・・

四ツ橋

お電話は用御の南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

のまさなみ
南一溫泉料理

くんなさいヲヽそふで有ろ〳〵そんなら出してやろこれか〳〵ホヽア、そりやしらみ紐でござります。なんだきたないやらふだなそんなら是かアヽクヽヽヽくすぐつたい〳〵そりやへそだ〳〵何だへそだてめエのへそは大き出でそだなアハアヽヽヽハヽヽヽ其下の方にきんが二兩包んでございますそれおまにはエヽいま〳〵しいべら棒めそんならいつそ此きんをと力に任せ引掴みぐつとしむればアイタ〳〵〳〵〳〵死るはい〳〵〳〵ハアヽと斗りにうんと其まゝいきはたへにけり遺の親仁も悔りしなむ三死だは是幸ひと彌次郎兵衛が帶ぐるゝとすつぽりはいだる丸裸墓所の方よりとつかはと經帷子につの帽子手早にきせてサア〳〵これでちつとは腹がいたかうやく代の其かはりと着物荷物を引さらへ千松よこいと手をひいてあし早にこそ立歸るしだいに更くる夜嵐のぞつと身にしみ彌次郎兵衛息吹かへし起上りヲヽ寒〳〵こゝはマどこしやしらんておれはマア一体どふしたのじやエヽこふとエヽマア御油の宿を放れて狐のまれをしたはト夫から小僧をぶつたはト喜太八は逃たはトそこで咽喉を〆上げられたはト夫から後はどんと夢中で何にも覺えがれエんだがコイツハ夢か知らんてヲヽさむ〳〵イヤ〳〵向ふにばかしよが有るはいして見りや夢ではないはいハテどふしたんだろふと撫廻し〳〵ヤア〳〵〳〵おれが着ているはコリヤコレ經帷子じやそふして額にごましほが當てあるヤア〳〵〳〵そんならおれは死だのかハア悲しや扨はきんを〆上げられそれで死だかハアヤア〳〵そんなら爰はめいどの道かいやい〳〵アヽ淺ましい心細い身に成つたこんな事ならかヽアにもとつくりと暇乞して置ふ物こんなに早ふ死

切封の書名るすトンゼレプにたなあ

華嫣麗妍の

ウユヴレ

・堀頓道・

松竹座

ふとは知らなんだ〳〵めいどの道はいくらと聞いたがほんにコリヤ眞くらがりだどふぞ極樂へ行きたい物じやが十萬億土とやら言が大体では行かれまいアヽ心細い〳〵斯成る事共露しらず嘸や後にて女房がけふは御ぶじの便りも有るかあすはつかひの人もやと日をかぞへ指を折り待こがれたるかひもなふ死だと言ふ事聞たなら嘸悲しかろ口おしかろ逢たかつたで有らふのになぜ逢はしてエヽコレ下さんせぬぞいな魂魄あの世に返るなら最一度かゝアの顔見たや夫迄もなく今こゝでおれが死だら後篇に嘸や一九がこまるで有ろそれも悲しいかゝアもかばゆし心一つを二道にめいどの闇に迷ふとは何の因果ぞ情ないどふぞ今一度生かへりかゝアの顔が只一目みたいわいのと身をもだへすゝり上げたる水ばなと涙と涎一時に落て流るゝ三つせ川末は漲る風情也ハアヽ迷ふた〳〵アノ鐘の音は慥にお寺極樂淨土の導引頼みお十念でも授からふチヽそふじや〳〵と立上り鐘鳴方を知るべにてただり行こそはかなけれ。（文彌）かくともしらず喜太八は漸遁れ此寺へ一夜の情丸寢して夢となく又現とも泣寢入つたる折こそ有あはれよのはかなき物はかけらふの（文彌）ありやなく〳〵彌次郎兵衛死だと思ひつめたさをこらへかねたる雨涙火かげしるべに立よつてさも哀れけなるこはれにて申し〳〵私は婆婆の者お願ひ有て參りましたどふぞお願ひ申ますといふ聲聞き付け和尚は立出で誰じや〳〵何用じやと戸口の鏁表にも和尚様私は今すぐ死たてのほや〳〵亡者で御座りますどふぞお願ひ申しますといふ聲渡耳に目覺す喜太八起ると明ける門の口彌次郎兵衛が姿もくら紛れとらへる袖のふり合せ和尚と心へ彌次郎兵衛をむりに引込み

師走の中座は

のみじなお

曾我廼家五郎劇

皆さんお揃ひで涙を流してうそをおもしろがり下さい

取りちがへ戸口を内からびつしやり引立ソリヤこそ亡者が來おつたぞ和尚様必ず外へ出まいぞや戸口はおれが押へて居るアゝ門に居るは幽靈じやて儕を入れてよいものかさいふもがた〳〵滕わな〳〵寺のじしんでごうぶるひエゝ何だかコウまつくらがりでは何にも分らぬ火打ちいづくさくらがりをさぐる手先に火打箱がち〳〵ふるふ附木の光りヤアコリヤ和尚じやない幽靈じや〳〵アゝ〳〵赦し賜へ〳〵〳〵と着物をあたまへすつぽり引かぶり正体さらになかりける彌次は恨のふるひ聲ノウ恨めしい喜太八め儕おれがしめ殺されるを見捨て能も逃おつたなアゝ赦し賜へ〳〵イヤ〳〵〳〵恨の磯魄此世に殘り汝もめいどの道連れにいざ連行て思ひしらさん來れや喜太八サアこいと付廻されて喜太八が氣も魂もきへ入る斗りヤア〳〵〳〵そんならお前は殺されて迷ふてきたかハア悲しやそふさはしらず今迄も此彌次さんばごふしてぞと案じて後へ戻らふにも何分こはくて一足も後へかへれる事かいのせふ事なしに此寺頼み泊てもらふた斗りじや是迄のよしみを思ひ恨をばらして浮んでたべなむあみだ佛〳〵〳〵南無妙法蓮華經〳〵おんあほきやべろしやのおまかほたらばにはんどはちんばらばらはりたや助け給へ天理王の令高間ケ原にイヤ〳〵〳〵修羅のくげんも其方故只恨めしやひやめしやお茶のめしや麥飯やとろゝにならくへ連行くと又立よれば身をちゞめアゝアレ人殺し助けてたべ和尚様〳〵のふと呼ばりわめけば戸を蹴放し和尚はかけ入り押し隔て珠數さら〳〵と押しもんで東方には五三一南方にはぐんだり夜叉明王西方でん〳〵九馬の三北方句二は五六十中央だんまりふさい明王五千有りや所詮ふけん〳〵泊

新興成美團お名殘り公演

十二月興行の

座　角

演開回二時半五ゝ午正

れや〳〵浮めや〳〵と祈りける胸に當りし彌次郎兵衛赦させ賜へアヽうくるしや我こそ東の都に住む彌次郎兵衛と言ふ者なり御油の宿の泊りにはずれ不慮のさいごを遂げたりしが日頃からの念佛ぎらいめいどの闇路に方角知れず何卒出家の御情けに彌陀の御國へ御導引頼み上げます〳〵と涙と鼻を横なでに恐れ〳〵て願ひける和尚うなづき善哉〳〵冥途の道の引導は差當たる愚僧が役。去りながらふせない經は讀がたし地獄のさたも錢次第布施物持參召されしかと聞いて彌次郎兵衛あたまをかき成程御尤路銀も少々有つたれど御油の宿にてすつぽりはがれ身はちやんぷらのすかんぴんどふぞお慈悲に結緣にて、彌陀の御國へ御いんどうお授りなされて下さりませアイヤ〳〵近年世がらが悪ふて寺から里の力持それ故げんぎんかけれなし。錢なき衆生は助からず七里けんぱいぜかせ〳〵ハアそれは何共ぜひがないコレ〳〵喜太八今聞く通りの此仕合せどうぞ貴樣が持ている路銀をおれにかしてたもエヽめつそふな／＼此金かしてたまる物かエヽとんだ事〳〵ムヽそんならいやかエヽ恨めしやアヽコレ〳〵貸ばいの〳〵と肌に付けたる胴卷をぐる〳〵はづし和尚の前さもおしそふに差出しハイ〳〵申し和尚樣此金は私が命代りの金なれどコウ見込まれたらしよことがないどうぞ是にて御引導授けてやつて下さりませ。チヽ善哉〳〵去りながらコリヤコレわづか二三兩十萬億土の道なれば宿々泊りのはたご代きちんにしてもたらぬ〳〵其上三づの川の越錢ばヽアの運上極樂の東門番への心付四十九日や五十兩合せて百兩百ケ日の追善供養御茶湯代にもたらぬ〳〵じやと申してモウ夫切一文もござりませぬ身に付いた物とては

きつとお氣に召す
今日の帝キネ映畫
を御覽下さい。

理屈ぬきに面白い
帝キネ映畫の封切

ひぜ……料覽親いすやトツグに位本樣皆

道頓堀 辨天座

千手觀音樣ばかりムゝそんならそこで裸になり着物殘らずぬがつしやれエゝ夫じやお前寒ふてこらへられませぬはいのムゝそんなら死人はこなたの連なれば連ていんでもらひませよエゝめつそふな事おつしやりますはいな然らばぬがつしやれじやと申して是がマアそんならおれがおはれうかアゝコレ〳〵さんだ事〳〵幽靈をおふてどふ成る物かそんならぬぐかサア夫はサア〳〵〳〵〳〵エゝ是はまた情けないムテ何んとせふぜひがないアゝぬぎます〳〵〳〵とふせふ〳〵に帶ぐる〳〵と布子諸共引丸め差出しハイ仰せに隨ひ脫ましてござりますチゝ善哉〳〵然らば道引致さんと珠數取り上げて勿体らしく汝元來しやれきのごとく臨終正念ちや〳〵むちや〳〵足は飛ぶに任せ歸るを知らずこいつ元來江戸子にてぢんばら〳〵ばらはり込み金銀財寶芥の如く遣ひなくし女郎小郎下女藝者後家尼人の女房までちやらくらこんたん手くだをもつておんころ〳〵せんだりまきやアおんころ〳〵せんだく婆アのふまくさんまんだのふだアさんせんだくじやこいつは一たいごうらくじやなむ三寶めつぼうかいむ中さん〳〵らつぴらんぐはい五十三次股にかけ道中たつしやしやれ惡口喧嘩口論其くせ聞た風めつたむせうつよい顏お先まつくら大きに憶病それ故丸裸やみくも言語同斷何ぞいふと畜生呼はり馬牛犬猫ちんあしたに道を聞て夕に死す共何ぞいとはん丸はだか明朝さめ來ってすべて夢のごとく恐るべし〳〵此行先はこもかぶり行たい所へつゝと行けと衣裝路銀を引さらへ一間の內へ入るよと見へしが和尙が姿忽ちに有りし家居も一時にきへて後なく明烏只ぼうぜんと彌次郎兵衛どふしてこゝへ喜太八も互ひに顏を見合せて、あ

お笑ひのとまらぬいきな舞臺へ

松竹家庭劇

へごうぞ

浪花座

十二月興行

正午と五時半二回開演

きれ果たる馬鹿らしさアヽコレ〳〵彌次樣お前の形はソリヤ何といふ形じやチヤ〳〵〳〵こりやどふしたんだろおいら夕ア死んだはづだがカノ親仁めにすつぱつとはがれて仕舞ふた、サアわしも坊主に皆取られ裸百貫一文なし今の坊主はどこへいたのやつぱりあいつも狐で有ふ大そふにばかされたぜ、イヤコレ喜太八どうぞ仕樣有は有るまいかどうと言ふたら乞食より外に思案はないはいなアアコリヤヤヽイそんな心細い事いふなやいそれだといふてどうなる物かお前も裸おれも裸かうも有ふか狂歌〆どふせうぞ何んとおしやうにみなとられやう〳〵じゆばん一つ喜太八とハどうだい中々うまくやりやがつたそんならおれも一つやつてやろふエヽこふつと〆ゆうべまでかされ着でゐた彌次郎兵衛けふかたびらになつた哀れさ。ハヽヽヤ夜があけたにこんなさまでうろ〳〵してもいられまい何かよい思ひ付は有るめエか有〳〵コレこゝにほうきの古いのがある。是でおれが奴ふるからお前は其下駄の古いので拍子を打ちなさへそふして成りとも行ふじやないかイヤコイツハちがだ面白い、そんなら喜太八ふりだせろとつかけべい（行列）ハレワイサノサ夕アもさん〳〵化された裸で道中が成る物か成つてもならいでもしよことがないハレワイサノサコレワイサノサ馬鹿な宿入り大鳥毛ヒン〳〵ドウ〳〵しやん〳〵〳〵夢ぢをたどるこゝちにて膝栗毛迚世の人の笑ひの種と成りにけり。

吉例顔見世興行

京都・四條

南座

・晝の部午前十時開幕

・夜の部午後五時開幕

四ツ橋よりの畔

十一月の文樂座

消息日誌

△十一月一日
名作の十一月興行のもとに本年掉尾を飾る最大興行の初日を開ける。

△十一月二日
前大阪府知事力石雄一郎氏が來觀された津太夫の扇ケ谷判官切腹の段の由良之助と判官との呼吸のあつた人形の動きと津の呼吸もつがせぬ咽喉にいたく引入れられ感動深き面持であつた。

△十一月三日
劇通家で鳴らしてゐられる大竹警察部長が御來觀されました。

△十一月四日
林第四師團長閣下、井上少將、疋田中將の諸星が御家族連れで御來觀あられ非常に御愉快に御見物なさいました。

△十一月五日
大阪呉服商同盟會主催のもとに、全國銘仙競技會御招待場となり各等を買切られ趣味の殿堂に一日をおくられました。

△十一月七日
土佐會。
赤池濃氏來觀さる。

△十一月八日
中座出演中の澤潟家一門來る、猿之助氏も茶屋場を觀入つてゐた。
東京より柳原伯來觀さる。

△十一月十日
陸軍省新聞班陸軍砲兵大尉淺野一男氏が大演習のため西下した序に立寄られた。
橋本組當主の主祭で先代新左衛門氏の追悼法要が始めて劇場を利用して營まれました。

現代的
廣告は廣告社に限る
大阪市南區御堂筋九町
齋部德太郎經營
電話戎三七五六番

△十一月十一日

歌人局長として有名な平塚大阪市電氣局長の案内で女流文壇の巨星平塚らいてう女史が見へられ特別室で『おかると並んで』の自署を收められいと滿足げでありました。

△十一月十三日

大阪府市並に商工會議所の招待で加奈陀實業視察團五十餘名の紳士淑女連を迎へました。非常に興味を惹かれたものと見へてかなり長時間をすごされました。別館食堂にて關市長の歡迎の辭團長の謝辭等交驩あり、人形を持廻つたところ手に取つて頻づけするなど非常に歡ばれました。

△十一月十三日

新任米國大使キャメロン・フォーブス氏がお見へになり熱心に御覽になつた後特別室で紋十郎がお輕を遣つて見せました

新任米國大使フォーブス氏　お輕に興ずる人形

△十一月十四日

獨逸伯林大學ゲーク教授が大阪醫大の弓倉氏の案内で來觀、特別室で紋十郎の遣ふお輕と握手して一段の興味を惹かれて歸られた。

私設電話工事は　・遞信局指定公認・

和田電機商店

大阪市北區中之島常安町
電話(44)堀佐土一七八七番
番八四六〇番
番一〇九一一番
地〇二町上東區寺王天市阪大　工場　掘替穴阪

人形ご握手するトムソン卿夫妻

がサービスのため式服持ひで華絢を極めました。

△十一月十九日

大阪府方面委員として素晴らしい業績を擧げてゐらるゝ岡嶋伊八氏の招待で柴田知事夫人、半井内務部長、大竹警察部長等要路の好者がお見えになりました。

△十一月二十日

堀江婦人會の方々が和やかなお集ひをこの趣味の殿堂で心ゆくばかりお娯みなさいました。

△十一月二十日

英國經濟使節トムソン卿の御一行を白井社長が御招きして、わが鄕土藝術の醍醐味を滿喫して戴きました。この日柴田知事夫人、半井内務部長夫人其他の御招きで一行の夫人連もお見へになり食堂でチーパーテーを開き非常に盛會を極めました。

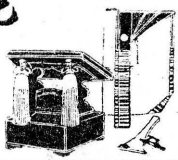
△十一月十七日

東丸醤油の大招待會で盛況を極めました

△十一月十九日

桐竹紋十郎後援のため本美人座が開業滿三周年記念祝賀會を兼て大鑑賞會が催されました。その名に背かぬ美人五十餘名

元祿太夫淨瑠璃本願寺
見物席 其他 淨瑠璃道具



加島屋竹中商店
大阪市東區唐物町四丁目御堂筋西へ入
電話船場一八六二番

た。當座よりは特に若手人形遣ひをして興を添えました。

人形ご提手したりの煩づけすると　加茂跨實業視察團一行

△十一月廿一日
文樂座後援會新町連が組織されて、約三百名の方々が清興に陶醉されました。

△十一月廿二日
大阪學生映畫聯盟並に大阪學生ドラマ・リーグの鑑賞會が開催されました。

△十一月廿三日
引つゞき學生諸氏の鑑賞會が催されました。

△十一月廿四日
前遞相久原房之助氏が初めてお見へになりました。

△十一月廿九日
大阪學生映畫聯盟並に大阪學生ドラマ・リーグの方々が研究觀劇會を開催されました。

△十一月三十日
右方々が引續き觀覽され非常の盛會でありました。

△十二月一日
絶大の人氣を戴いた名作の十一月興行もいよ〳〵本日を以て千秋樂を致しました

優秀品紹介

この冬は防寒用として大衆何

フェルトカラーと

高級品

セームカラーが

洋服黨を完全に風靡して居ます。

なぜ

それは、肌さわりよい。

暖い。丈夫な。の三拍子そろってゐるから

今一ツ

本カラーが、模造品の粗雑なるに比し、斷然優良な事を一般需用者より認識して頂ゐたため。

到る所の洋品雜貨店にて販賣

文樂座使用規定

一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ。

二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス

三、當座御使用料金ハ別表ノ通リデアリマス
長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス

四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デラレシ時ハ半額御返却申シマス

五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用デ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス

六、御使用者ノ御希望デ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用デ特別ノ設備モ出來マス

七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス

八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス

九、御使用者ハ當座從業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン

十、當座從業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセヌ

十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料　（一日）

時間／場所	收容人員	晝（自正午至午後五時）		夜（自午後六時至同十一時）	晝夜（自正午至午後十時）
文樂座	約850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

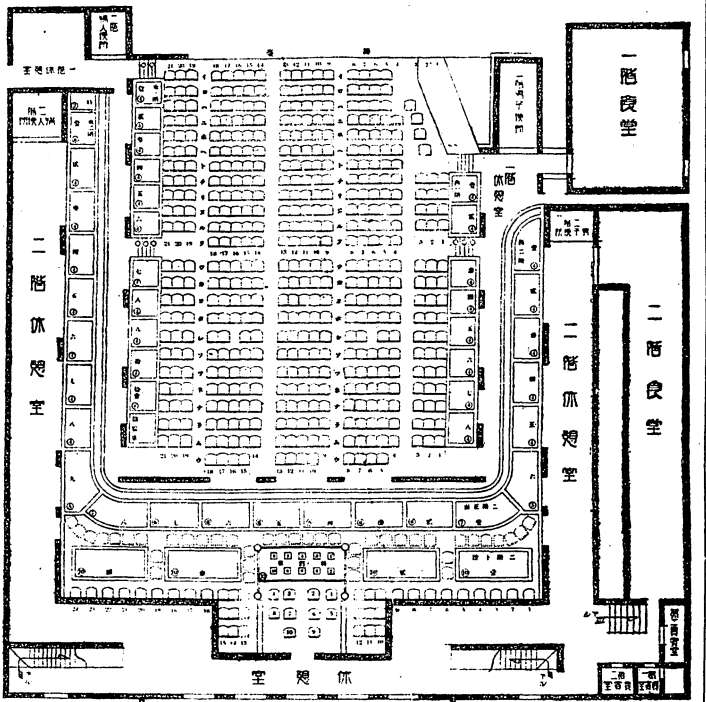
◇上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◇割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器具	備考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同　普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝　夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝　夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝　夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同　大（1000W）小（500W）	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W　500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W　500W	1臺	2圓
フットライト	20W　100W　7球	1本	1圓
セラチンペーパー		1枚1回	1圓
大衝立	晝　夜	1對	5圓
演壇設備	同	1回	2圓
其他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、電話係2名、下足2名	1日1人　1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラヂエータ使用料			無料

文樂座御席場御案内



御觀覽料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も右席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にされます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

温かいお料理とお飲物

南直營 文樂座食堂御案内

洋食堂（西館階上）

スピード・ディナー（御定食）一、五〇
スープ 一、四〇
フライ（海老、魚）
ホームレッツ
コロッケー
ビーフカツレツ
チキンカツレツ
ビーフステーキ（五分間）
カレーライス
チキンライス
コールドチキン
コールドハム
コールドビーフ
マカロニーチース
アスパラガス
サンドウイッチ
ソーダ水（特製）
文樂スペシアル
ビーフステーキ
時價四〇
四〇
四〇
四〇
四〇
三五
四〇
五五
五五
四〇
四〇
四〇
二〇
一、〇〇

和食堂（西館階下）

吸付辨當 一、〇〇〇
御食事（五品御飯香物） 二、〇〇〇
親子丼 一、五〇

にぎり壽司 五〇
ちらし壽司 五〇
雀壽司 五〇
鐵火卷 五〇
お赤だし 二五
吸物 三五
菊正宗 三五
特アサヒビール 五〇
ダイヤレモン 三〇
ソーダ水（普通） 一五
冷コーヒー 一〇
紅茶 一〇
アイスクリーム 二〇

酒場（西館階上）

文樂カクテル 七〇
マンハッタンカクテル 六〇
ドライマテニイ 六〇
アブサンフラッペ 一〇
ミリオンダラー 九〇
ミリオネア 七〇
ウイスキー 各種
コニヤック 各種
リキュール 各種
チーズ 各種
ソーダビスケット 二〇

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他暇間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてあります御座席では御遠慮下さい。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

御携帶品は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

お出口は

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。蒸しタオルの準備が御座ゐますから御自由に御使用下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は作勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、其他社交場として御集會に最善の御便宜を計ります

お電話は

正面西側本家茶屋階段下に御座います。

自働車の御用は

文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してゐます。

露臺にも

眺望よき休憩所が御座ゐます

四ツ橋 **文樂座**
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南 七四〇八番 三七八八番

◇文樂座御ひゐき名簿募集◇

一、申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には兩面ともに御住所御芳名を御明記下さい（御往所御芳名の他一切不要）

一、御ひゐき名簿作製の上御芳名に隨つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市西區四ツ橋　文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」　特價　金貳　圓

美しいグラフと興味ある好讀物月刊雜誌

道　頓　堀　一部　金三十錢

美しい原色版飯皮製床しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書　二枚一組　金十五錢

本年の忘年會は

溫か い明るい『宴會劇場』で

文樂座の御宴會

（B）金三圓五十錢（御一人樣）

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

（A）金四圓五十錢（御一人樣）

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆樣本位の御定食
（和食洋食兩樣の設備が御座あります）
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

□お申込は二十人樣以上を受付申上ます。
□記念撮影のお寫眞は終演と同時にお持歸り出來るやういたしております。
□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします
□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。
□お電話の御用は前賣專用南四七一一・三七八八・七四〇八番へ

昭和五年十二月四日印刷
昭和五年十二月五日發行
大阪・四ツ橋・文樂座
編輯兼發行人 大塚良三
印刷者 大阪市西區土佐堀通一丁目 永井太三郎
印刷所 大阪市西區土佐堀通一丁目 永井日英堂印刷所

海綿用クラブ白粉

上品で美しいお化粧が思ひのまに出來る、海綿用クラブ白粉

アレ止によくきく

クラブ美身クリーム